

朝来市山東町所在

# 方谷遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月

兵庫県教育委員会

朝来市山東町所在

# 方谷遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書





遺跡遠景（南西より）



遺跡と柴集落・遠阪峠（西より）



遺跡近景（南西より）



遺跡近景（西より）



調査区全景（南西より）



投棄された砾群（北東より）



礪群細部（南西より）



礪群除去後（北東より）



柱穴群（南より）



P-3 内の柱根（東より）



石器



縄釉陶器



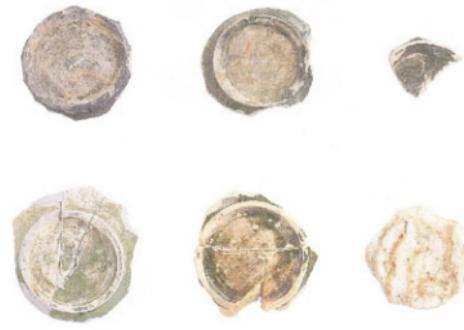
素地を修復した縄釉陶器



灰釉陶器



绿釉陶器内面



绿釉陶器外面



黒色土器 B 類



黒色土器 A 類内面



黒色土器 A 類外

## 例　　言

1. 本書は朝来市山東町柴に所在する方谷遺跡の発掘報告である。
2. 発掘調査は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所が行う一般国道483号線北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴って実施したものである。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会と豊岡河川国道事務所が委託契約を締結し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施し、平成18年度の整理調査は埋蔵文化財調査事務所で、平成19年度の整理調査は兵庫県立考古博物館で行った。本発掘調査・整理調査に係る経費は豊岡河川国道事務所が負担した。
4. 遺跡の全体図は航空写真測量で行った。
5. 遺物写真的撮影は外部委託で実施した。
6. 本書の執筆は本文目次に記したとおりに分担し、編集は嘱託員佐々木智子の協力を得て吉議雅仁が行った。
7. 本発掘調査で作成した写真・図面等の記録類と出土した遺物類は全て兵庫県立考古博物館で保管している。
8. 本発掘調査に際しては、関係各期間をはじめ、以下の方々に御教示、御協力を頂いた。御芳名を記して深謝の意を表す。  
加賀見省一（日高町教育委員会）・谷本進（養父市教育委員会）・田畠基（朝来市教育委員会）・  
中島雄二（朝来市教育委員会）・山根実生子（養父市教育委員会）

## 凡　　例

1. 遺物には通し番号を付し、土器・土製品は区別なく通し番号とし、木製品・金属製品・石製品には番号の頭にそれぞれW・M・Sを付している。土器の内、須恵器は断面黒塗り、弥生土器・土師器・黒色土器・施釉陶器は白抜きとして区別している。
2. 本書に記述した標高は東京湾平均海面（T.P.）からの高さで表し、国土座標値については日本測地系で得た値を国土地理院のTKY2JGDを使用して世界測地系に変換したものである。また本書で使用している方位は座標北を示している。

# 本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯と経過	(吉誠) … 1
第2節 遺跡の位置と環境	(吉誠) … 3
1 遺跡の位置	
2 遺跡の環境	
第2章 調査の結果	
第1節 造構	(吉誠) … 9
第2節 遺物	(森内秀造・吉誠・佐々木) … 13
第3章 まとめ	(吉誠) … 21

# 挿図目次

第1図 調査区位置図	4
第2図 周辺遺跡分布図	6
第3図 調査区全体図	10
第4図 土層断面図①	11
第5図 土層断面図②	12
第6図 造構断面図	12
第7図 造構出土土器	13
第8図 古墳時代の土器	13

# 表目次

第1表 遺跡地名表	7
第2表 墓書土器一覧表	19
第3表 出土遺物観察表	21~24

# 図版目次

図版1 出土遺物1	図版7 出土遺物7
図版2 出土遺物2	図版8 出土遺物8 (施釉陶器・墨書き土器)
図版3 出土遺物3	図版9 出土遺物9 (土製品・木製品)
図版4 出土遺物4	図版10 出土遺物10 (鉄製品・石製品)
図版5 出土遺物5	図版11 出土遺物11 (石製品)
図版6 出土遺物6	

## 卷頭写真図版目次

- |         |                       |          |   |
|---------|-----------------------|----------|---|
| 卷頭写真図版1 | (上) 遺跡遠景 (南西より)       | 卷頭写真図版5  | (上) 柱穴群 (南より)                             |
|         | (下) 遺跡と柴集落・遠阪峠        |          | (下) P-3内の柱根 (東より)                         |
|         | (西より)                 | 卷頭写真図版6  | (上) 石帶<br>(下左) 緑釉陶器                       |
| 卷頭写真図版2 | (上) 遺跡近景 (南西より)       |          | (下右) 素地を修復した緑釉陶器                          |
|         | (下) 遺跡近景 (西より)        | 卷頭写真図版7  | (上) 灰釉陶器<br>(中) 緑釉陶器内面<br>(下) 緑釉陶器外       |
| 卷頭写真図版3 | (上) 調査区全景 (南西より)      |          | (上) 黒色土器B類<br>(中) 黒色土器A類内面<br>(下) 黒色土器A類外 |
|         | (下) 投棄された礫群<br>(北東より) | 卷頭写真図版8  |   |
| 卷頭写真図版4 | (上) 矣群細部 (南西より)       |          |   |
|         | (下) 矣群除去後 (北東より)      | 卷頭写真図版9  | 出土遺物 (1)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版10 | 出土遺物 (2)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版11 | 出土遺物 (3)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版12 | 出土遺物 (4)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版13 | 出土遺物 (5)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版14 | 出土遺物 (6)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版15 | 出土遺物 (7)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版16 | 出土遺物 (8)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版17 | 出土遺物 (9)                                  |
|         |                       | 卷頭写真図版18 | 出土遺物 (10)                                 |
|         |                       | 卷頭写真図版19 | 出土遺物 (11)                                 |
|         |                       | 卷頭写真図版20 | 出土遺物 (12)                                 |
|         |                       | 卷頭写真図版21 | 出土遺物 (13)                                 |
|         |                       | 卷頭写真図版22 | 出土遺物 (14)                                 |
|         |                       | 卷頭写真図版23 | 出土遺物 (15)                                 |
|         |                       |          | 出土遺物 (16)                                 |

## 写真図版目次

- |       |                         |        |           |
|-------|-------------------------|--------|-----------|
| 写真図版1 | 遺跡全景 (航空写真)             | 写真図版8  | 出土遺物 (1)  |
| 写真図版2 | (上) 遺跡全景 (南西より)         | 写真図版9  | 出土遺物 (2)  |
|       | (下) 調査区内の土層             | 写真図版10 | 出土遺物 (3)  |
| 写真図版3 | (上) 柱穴群 (東より)           | 写真図版11 | 出土遺物 (4)  |
|       | (中左) P-3柱根出土状況          | 写真図版12 | 出土遺物 (5)  |
|       | (中右) P-1土器出土状況<br>(東より) | 写真図版13 | 出土遺物 (6)  |
|       | (下左) P-3内の柱根            | 写真図版14 | 出土遺物 (7)  |
|       | (下右) 横植出土状況 (北東より)      | 写真図版15 | 出土遺物 (8)  |
| 写真図版4 | (上) 谷肩部と礫群 (南より)        | 写真図版16 | 出土遺物 (9)  |
|       | (下) 谷肩部と礫群 (東より)        | 写真図版17 | 出土遺物 (10) |
| 写真図版5 | (上) 矄群全景 (南西より)         | 写真図版18 | 出土遺物 (11) |
|       | (下) 矄群全景 (北東より)         | 写真図版19 | 出土遺物 (12) |
| 写真図版6 | (上) 矄群細部 (北東より)         | 写真図版20 | 出土遺物 (13) |
|       | (下) 矮群細部 (南西より)         | 写真図版21 | 出土遺物 (14) |
| 写真図版7 | (上) 矮群除去後 (北東より)        | 写真図版22 | 出土遺物 (15) |
|       | (中) 矮群除去後の斜面 (東より)      | 写真図版23 | 出土遺物 (16) |
|       | (下) 矮群除去後の斜面 (西より)      |        |           |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

兵庫県の中央には東西に中国山地が連なり、この山地によって地勢や気象条件が大きく異なる。中国山地南側は気温も温暖少雨であり、瀬戸内海という船舶航路に恵まれ、早くから重工業を中心とした産業が発達し、物資輸送のための高速道路あるいは自動車専用道路の整備が進められてきた。現在では、東西に名神高速道路・山陽自動車道・中国自動車道といった高速道路、阪神高速道路や第二神明道路等の自動車専用道路、南北にも県東部に北近畿自動車道、中央部に播但連絡道路等が整備され、現在でも第二名神や加古川南北道路等の計画・整備が進められている。

一方、中国山地北側の但馬地域は山がちな地方であり、高速道路・自動車専用道といった高規格道路の整備は遅れ、国道9号・312号といった一般国道が物資輸送の基幹道路の役割を担ってきた。播磨と但馬を繋ぐ播但連絡道も但馬の南端で止まり、それ以北は計画のみが存在するというような状態で、物資輸送の点では大きく遅れをとっていた。

そのため、国土交通省は兵庫県とともに但馬地域の高規格道路の整備を進めることとし、国土交通省は北近畿自動車道舞鶴若狭道の七日市インターチェンジから但馬北部の豊岡市を結ぶ北近畿豊岡自動車道を計画、兵庫県では播但連絡道の和田山までの延伸を決め、和田山にジャンクションを建設し北近畿豊岡自動車道と接続する計画を作成した。早くから高規格道路の整備を熱望していた沿線の市町も期成同盟を結成して、早期実現を目指していた。そこに、平成7年の阪神淡路大震災で、非常時における物資輸送の確保が問題となり、これらの計画も、その実現が急務となった。

国土交通省では北近畿豊岡自動車道計画の内、遠阪峠から和田山ジャンクションまでの間を北近畿自動車道春日和田山道路Ⅱとして先行実施することを計画し、水上郡側を兵庫国道工事事務所（当時）が、朝来郡側を豊岡国道工事事務所（当時）が担当して実施することになった。

計画が具体化し、現地に用地杭が打設された平成5年に兵庫県教育委員会では分布調査を実施、その結果、計画用地の実に80%に埋蔵文化財が存在する可能性がありと判断され、その取り扱いが重要課題となった。北近畿豊岡自動車道の建設推進は兵庫県の重要施策であり、教育委員会でも重点的な取組みが必要であると判断し、計画が本格的に始動し始めた平成9年に調査条件が整った箇所から確認調査を実施した。

方谷遺跡は平成5年度の分布調査で縄文陶器等が採集されたために、平成8年度に確認調査を実施した（第1次確認調査）が、残念ながら遺構・遺物ともに検出されなかっただため、埋蔵文化財は存在しないと結論付けられた。しかし、平成12年度に柴別久遺跡（現柴遺跡）の本発掘調査を実施したところ、「駄子云々」と記載された木簡が出土し、付近が古代山陰道の粟鹿駅の推定される範囲であったことから注目を浴び、また柴別久遺跡がそうした遺構・遺物の出土が予想もされない谷間に位置していたことで、隣接していたことから、谷間に位置しながら縄文陶器が表採されている方谷遺跡についても、慎重を期して再度確認調査の必要性が言われ、国土交通省と協議し、平成13年度に再確認調査を実施した。その結果、少量ながらも遺構が確認され、本発掘調査を実施する運びとなった。

## 第2節 調査の経過と体制

### 1. 第1次確認調査の経過と体制

遺跡の有無、遺跡の範囲を確定すべく、20mごとに2×2mのグリッドを設定し、必要に応じてトレンチなどを設けて調査を行った。その結果、調査面積は44m<sup>2</sup>となった。調査にあたってはバックホーにより表土を取り除き、遺物・遺構の検出に努めたが、遺物・遺構とも検出されなかった。

#### 調査体制

調査担当機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者 調査第2班 森内秀造 高木芳史

調査期間 平成9年2月26日～2月27日

### 2. 第2次確認調査の経過と体制

第1次確認調査で埋蔵文化財が存在する可能性は低いと判断されたが、隣接する柴別久遺跡（当時名）の平成12年度の調査で粟鹿駅に隣接する遺跡である可能性が高まり、本地点について再検討するため、再度確認調査を実施することになった。調査は2×4mのトレンチを6ヶ所に設定して行い、表土から遺構面までは機械力で除去し、壁面と遺構面の精査を人力で行った。その結果、包含層の堆積が認められ、1ヶ所のトレンチでは柱穴が確認された。

#### 調査体制

調査担当機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者 調査第4班 薩田淳 小川弦太

調査期間 平成14年2月18日～2月20日

### 3. 本発掘調査の経過と体制

第2次確認調査の結果を受けて、本発掘調査を実施した。調査は茶すり山古墳の墳丘部の調査が終了した7月29日から開始し、先ず機械力で耕土から包含層までの土層を除去し、包含層以下を人力で掘削する方法を探った。谷肩部際では多量の礫とともに奈良時代から平安時代までの土器が出土し、僅かではあるが柱穴が検出された。それらの遺構については詳細な図面等は人力で作成し、全体図については9月10日に航空写真撮影を行って図化した。その後、柱穴等を斬ち割って最終確認を行い、9月12日に現地での調査を終了した。

#### 調査体制

調査担当機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者 調査第1班 古誠雅仁 上田健太郎

調査期間 平成14年7月29日～9月12日

### 4. 整理調査の経過と体制

平成18年度の整理調査は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で、水洗い・ネーミング・接合・復元・実測・写真撮影等を行い、平成19年度は埋蔵文化財調査事務所は兵庫県立考古博物館と名称変更となつたため、そちらでトレース・レイアウト・報告書刊行を行つた。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

遺跡の位置する朝来市は兵庫県北部の但馬地方の南東隅部にあたり、東に遠阪峠を越えれば丹波、南に円山川を通り生野峠を越えれば播磨に至る地域である。朝来市は和田山町・山東町・朝来町・生野町の4町が平成17年に合併し、市制が引かれた。市は南北に長く、北は豊岡市に、東は京都府福知山市と丹波市・多可町に、南は神河町、西は宍粟市・養父市に接する。総面積約403km<sup>2</sup>で、約34,791人が暮らす市である。

市域の地形は中国山地東部の北斜面と、そこから北に派生する低山地帯、夜久野高原などの浸食が進んだ丘陵地帯であり、山の多い地域である。山地からはかつて銀が産出され、生野鉱山等が設けられていた。市域南端の山地は日本海に注ぐ円山川と瀬戸内海に注ぐ市川の源流域であり、兵庫県の南北の分水嶺となっている。市川流域の市域は南端の一部のみであり、大部分は円山川とその支流域に広がる。平野部は円山川とその支流域に細長く広がって盆地状となり、円山川沿いには朝来盆地・和田山盆地、円山川の支流である与布上川流域は山東盆地が広がる。

市域はかつてから但馬の玄関口と言われ、古代から交通の要衝の地域であり、主要な交通路は、細長い平野部を河川沿いに走る。播磨への交通路は和田山盆地から円山川沿いに通り、JR播但線と国道312号が主要な交通路である。東西の交通路はJR山陰線と国道9号・312号であり、国道9号線を円山川沿いに西に行けば但馬西部を経由して鳥取に、東に行けば丹波・京都に通じる。播磨から朝来盆地を南北に連絡してきた国道312号は和田山盆地の北部で西に曲がり、円山川沿いに下って、但馬北部に通じる。山東盆地で国道9号から分岐する国道427号は山東盆地北端を進み、遠阪峠を越えて丹波に至る。古代山陰道はこの国道沿いに推定されており、山東盆地では遠阪峠口に栗鹿駅が推定されている。

遺跡はこの遠阪峠は口に所在する「柴」集落背後の谷に入った狭小な谷内部に位置しており、遺跡からの眺望は極めて悪く、国道427号も直接みることはできない。



道路完成後の山東盆地



道路完成後



第1図 調査区位置図

## 第2節 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

遺跡の位置する朝来市山東町柴は山東盆地の東端にあたり、丹波と但馬の国境である遠阪峠への但馬側からの登り口にあたる。逆に言えば、丹波国からの但馬への入り口にあたる地区であり、古代山陰道の栗鹿駅が推定されている。柴集落内にはほぼ東西の直線的な道路が存在し、これが山陰道にあたる可能性があり、道路北側には方形の地割りが遺存している。

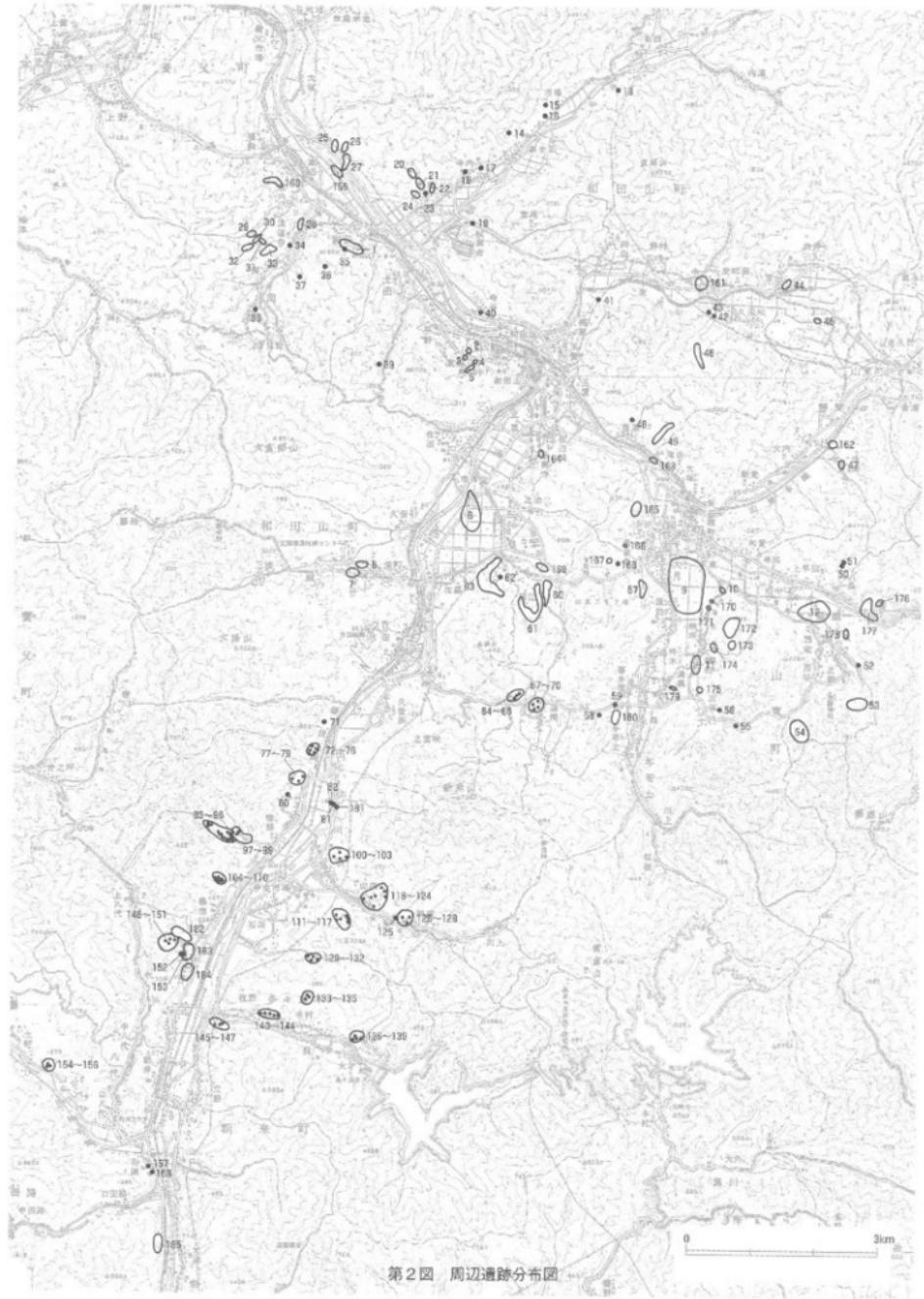
地形的には柴集落は低位段丘上に位置しており、前面を西に流れる柴川との間は段丘崖となっている。この柴集落背後には三本の細長い谷が合流し、南西に開口した谷部が存在する。遺跡は、まるで表通りから隠れたように、最も奥の谷の口に位置し、柴集落とは最短距離で約100mを測る。遺跡がある谷は幅約40mと細く、谷内部は水田化されて谷口に向かって階段状に下がるとともに、西側には段丘が山裾沿いに細長く形成されて、高くなっている。このため、谷川は谷東端の山裾を流れ、柴集落の乗る段丘を迂回して谷口を西進する。調査区内は谷口北側の山裾側の地区が段丘上、その他は谷底低地にあたる。

### 2. 歴史的環境

弥生時代末～古墳時代初頭から尾根上に营々と築かれてきた小規模古墳は、6世紀後半に埋葬施設に横穴式石室が採用されるようになって終焉する。新しく登場した横穴式石室墳はそれまでの小規模古墳とは古墳の立地は大きく変え、谷筋に入った山麓や谷間に位置するようになる。これは石室構築のための石材がより入手しやすい場所に古墳の立地を移した結果と考えられる。山東盆地では柿坪遺跡から与布土川をさかのぼった三保・喜多垣・森・津黒・追間といった所に追間古墳群(64～66)・池之端古墳群(67～70)をはじめ、三保東山古墳(55)や三保荒地古墳(56)等が築かれている。栗鹿遺跡の南方では谷筋に入った栗鹿山麓の谷筋に西谷古墳群(54)をはじめとする多くの横穴式石室の古墳が所在している。和田山盆地では枚田地区の周囲にも若干存在するが、筒江集落の周囲に城ヤブ古墳群(62・63)・長尾古墳群(60)等が築造されており、この区域に集中するような傾向がある。その中では金銅装太刀を出土した長尾古墳(60)や比較的大規模な石室構築している城ヤブ1号墳(62)等が存在する。金銅装の遺物は朝来盆地側でも三町田古墳(125)・山内仲田古墳(124)等で出土している。さらに和田山盆地から円山川を下った糸井地区の春日古墳(23)・宮内地区の宮内中山6号墳(31)は金銅装太刀三口を出土している。今のところ山東盆地側ではこうした金銅装の遺物は知られておらず、円山川本流域が優位となっている。

須恵期の窯跡としては和田山盆地北部の岡田窯跡群が知られているが、すでに消滅している。この他、朝来盆地には松谷窯跡が存在する。

律令期、山東盆地・和田山盆地・朝来盆地は但馬国朝来郡に編入される。倭名類聚抄では朝来郡には山口・桑市・伊由・賀都・枚田・東河・朝来・栗賀・磯部の9郷が記され、山口・桑市・伊由の三郷は朝来盆地内に、賀都・枚田・東河は和田山盆地内とその北部に、栗賀・磯部は山東盆地に、朝来も不確かながらも記述順から山東盆地に否定されている。遺跡周辺は栗鹿里内に比定されている。群衆の所在地については和田山町筒江地区の東側に求める説や、朝来郷が山東盆地に否定されるとして山東盆地の入り口に近い谷の山裾の段丘上に求める説があるが定かでない。



第2図 周辺遭跡分布図

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	高瀬遺跡	63	城ヶヤ A～D (1～56号墳)	125	三町田古墳
2	宮ノ本遺跡(宮ノ本地区)	64	迫間1・4～15号墳	126	伸山1号墳
3	宮ノ本遺跡(妙見谷登り立地区)	65	迫間2号墳	127	伸山2号墳
4	宮ノ本遺跡(同ノ段地区)	66	迫間3号墳	128	伸山3号墳
5	恵谷遺跡	67	池ノ瀬1号墳	129	松谷1号墳
6	加藤遺跡(谷ヶ田地区)	68	池ノ瀬2号墳	130	松谷2号墳
7	段Ⅰ散布地	69	池ノ瀬3号墳	131	松谷3号墳
8	段Ⅱ散布地	70	池ノ瀬4号墳	132	松谷4号墳
9	神坪遺跡	71	久世田1号墳	133	松尾谷1号墳
10	大洞寺7号墳	72	静ヶ瀬1号墳	134	松尾谷2号墳
11	越田塚塼遺跡	73	静ヶ瀬2号墳	135	松尾谷3号墳
12	栗庭遺跡	74	静ヶ瀬3号墳	136	和谷1号墳
13	オサン古墳	75	静ヶ瀬4号墳	137	和谷2号墳
14	市場1号墳	76	静ヶ瀬5号墳	138	和谷3号墳
15	市場2号墳	77	カクシ谷1号墳	139	和谷4号墳
16	市場3号墳	78	カクシ谷2号墳	140	塚原1号墳
17	マエダニ古墳	79	カクシ谷3号墳	141	塚原2号墳
18	イズキミ古墳	80	北原敏古墳	142	塚原3号墳
19	寺内オタケ山古墳	81	ビシャモン谷1号墳	143	塚原4号墳
20	大谷古墳群	82	ビシャモン谷2号墳	144	塚原5号墳
21	麻原寺谷古墳群	83	本谷1号墳	145	口多々良木1号墳
22	上山古墳群	84	本谷2号墳	146	口多々良木2号墳
23	春山古墳	85	本谷3号墳	147	口多々良木3号墳
24	西ヶ谷古墳群	86	本谷4号墳	148	トウスガ谷1号墳
25	広六林古墳群	87	本谷5号墳	149	トウスガ谷2号墳
26	奥山古墳群	88	本谷6号墳	150	トウスガ谷3号墳
27	奥山A古墳群	89	本谷7号墳	151	トウスガ谷4号墳
28	宮ノ山古墳群	90	本谷8号墳	152	音谷1号墳
29	梅が池6～12号墳	91	本谷9号墳	153	音谷2号墳
30	宮内イサク古墳群	92	本谷10号墳	154	白鹿1号墳
31	中山4～8号墳	93	本谷11号墳	155	白鹿2号墳
32	梅が池1～5号墳	94	本谷12号墳	156	白鹿3号墳
33	法道寺城跡	95	本谷13号墳	157	一の宮1号墳
34	上地古墳	96	本谷14号墳	158	一の宮2号墳
35	高瀬川の上古墳	97	宮谷1号墳	159	高田遺跡
36	高瀬古竹古墳	98	宮谷2号墳	160	寺ノ奥散布地
37	東林1号墳	99	宮谷3号墳	161	東河寺遺跡
38	千石塚古墳	100	澤大谷1号墳	162	宮ノ越散布地
39	土田塚が谷古墳	101	澤大谷2号墳	163	鞠敷古墳
40	寺谷古墳	102	澤大谷3号墳	164	法興寺跡
41	柳原2号墳	103	渾人谷4号墳	165	上竹敷古墳
42	久田和1号墳	104	ミゾ谷1号墳	166	樂音寺散布地
43	久田和2号墳	105	ミゾ谷2号墳	167	梶原遺跡
44	白井塚古谷古墳群	106	ミゾ谷3号墳	168	梅ヶ作遺跡
45	岩戻谷1・2号墳	107	ミゾ谷4号墳	169	筒江大姫遺跡
46	池の谷古墳群	108	ミゾ谷5号墳	170	芝花敷古墳 A
47	塙田1・地1～4号墳	109	ミゾ谷6号墳	171	芝花敷古墳 B
48	水谷古墳	110	ミゾ谷7号墳	172	五反田 A～C 遺跡・1号墳
49	江谷1～12号墳	111	南山1号墳	173	馬場敷古墳 B
50	大原1号墳	112	南山2号墳	174	越田宮之前遺跡
51	大原2号墳	113	南山3号墳	175	恋谷遺跡
52	新立谷池南古墳	114	南山4号墳	176	方谷遺跡
53	瀧ノ口古墳群	115	南山遺跡	177	柴遺跡
54	西谷古墳群	116	南山5号墳	178	押花敷古墳
55	三徳東山古墳	117	南山6号墳	179	二保遺跡
56	三保尾愛地古墳	118	山内1号墳	180	森向山遺跡・古墳群
57	城ノ越古墳群	119	山内2号墳	181	ビシャモン谷遺跡
58	打田古墳	120	山内3号墳	182	釣坂遺跡
59	打田2号墳	121	山内4号墳	183	松本遺跡
60	長尾古墳群・長尾中畠古墳群	122	山内5号墳	184	立臨庵寺
61	箭江古墳群	123	山内6号墳	185	米跡前遺跡
62	城ヶヤ1号墳	124	山内仲田古墳		

山東盆地・和田山盆地内には古代の山陰道が通過し、栗鹿駅が置かれている。現在山陰道については遠阪峠から山東盆地に入り、柴川に沿って下り、そのまま国道9号沿いに進むルートや、山東町末宋から南に折れ、楽音寺から越えて和田山盆地に入り、さらに和田山盆地から山間を進むルート等が言わされている。栗鹿駅については遠阪峠の但馬側の口に求めることでは一致しているが、詳細な場所では一致していない。最近は山東町柴遺跡の成果から柴集落付近に求める説が有力になってきている。

道路遺構は和田山盆地側の加都遺跡（6）からは、播磨と但馬を繋ぐ「但馬道」と仮称される道路遺構が約600mに渡って検出されている。道路の側では井戸も検出されている。

集落遺跡は平野部に展開した古墳時代集落は終焉し、律令期に入ると山間や谷間に居住条件が必ずしも良くない場所に、極めて小規模に営まれるようになる。

古墳時代に大規模に発展した柿坪遺跡や栗鹿遺跡・加都遺跡は7世紀前半には相次いで終焉し、律令期には継続しない。これ以降、平野部の中央で大規模に集落遺跡が展開されることではなくなり、律令期の居住遺跡は盆地縁辺の谷間に、まるで一軒単位とも採れるような小規模に展開することになる。山東盆地側では柴遺跡（177）・押花散布地（178）・本遺跡（176）・三保遺跡（179）・越田宮ノ前遺跡（174）・梶原遺跡（167）・梅ヶ作遺跡（168）がある他、一旦途絶えた栗鹿遺跡（12）でも西端に建物が建築されている。和田山盆地側では筒江大垣遺跡（169）、朝来盆地では釣坂遺跡（182）ある程度である。

柴遺跡は極めて湿潤で狭小な谷間に位置する小規模な遺跡で、小規模な建物が三棟復元されている。「駅子」の記載がある木簡が出土し、栗鹿駅との関連が言われている。押花散布地は谷筋に面した狭い山麓の平坦面に位置し、圃場整備に伴って確認調査がされ、柱穴等が検出されている。栗鹿遺跡では溝で区画した内部に奈良時代初頭の掘立柱建物2～3棟が検出されている。

こうした遺跡の持つ特徴はその出土遺物にある。小規模で立地条件の悪い遺跡でも、木簡・墨書き器といった文字資料遺物や施釉陶器が量の差はあるものの出土している。木簡・墨書き土器・施釉陶器が出土した遺跡には柴遺跡・釣坂遺跡があげられる。柴遺跡は先述したように栗鹿駅との関連が言われ、釣坂遺跡は谷筋に廃棄された状態で遺物が出土し、木簡はほとんど記載内容が判明しないが、墨書き土器に「郷長」と記載するものがあり、郷家との関連が言われている。木簡・墨書き土器・円面鏡が出土した遺跡には加都遺跡がある。加都遺跡は先述したように道路遺構が検出された遺跡であり、出土した木簡には荷札と見られる木簡には「山口里」・背書木簡には「郡」・「長」という字が記載され、他にも「神部」と記載できそうな文字を含む耕地に関する木簡がある。これらの内容は郡に関するものと考えられ、付近に郡衙が存在している可能性もある。墨書き土器と施釉陶器を出土した遺跡には本遺跡・梶原遺跡・筒江大垣遺跡がある。墨書き土器だけが出土した遺跡には栗鹿遺跡がある。先述した区画を伴う建物群の西側の流路から出土したものであるが、「神部」と記載されており、同様の氏族名が『栗鹿大（明）神元記』にみえることから、栗鹿神社との関連が言われている。「神部」という氏族名は加都遺跡や豊岡市宮内黒田遺跡出土木簡にもみえ、古代但馬の広範にみえる氏族名である。ただ、いずれの遺跡も官衙関連が考えられる遺跡である。

寺院跡は山東盆地側では知られていないが、和田山盆地側で法興寺跡（164）が、朝来盆地では立脇魔寺が建立されている。この内、法興時は伽藍配置が明らかでないものの、古新羅系の素弁蓮華文軒丸瓦を出土し、独自色の強い寺跡とされている。長尾古墳で出土した金銅装太刀には唐草文を透かし彫りした金具が使用されており、関連している可能性も考えられる。

## 第3章 調査の結果

### 第1節 遺構

#### 1. 概要

調査区内で検出された地形は大きく段丘上と谷底低地に二分される。段丘上にあたるのは調査区北端で、耕土直下に基盤層である黄褐色の粗砂～中砂層が検出された。基盤層上面は水田化の際に削平を受けている可能性もあるが、ほぼ平らであり、標高165～165.9mを測る。この面ではSK-1が検出されたが、これ以外には遺構らしいものは検出されず、暗渠や水田に伴う溝が検出されたのみである。

段丘と谷底低地の境界は中央から東半では傾斜が比較的緩く、中央では礫群や柱穴等の遺構が検出された。礫群の西端からは崖状となり、崖下にも段丘の基盤層が確認でき、また崖裾に並行して細溝が検出された。これらのことから、崖は水田化の際に削平によって創出されたものであり、当初は細溝付近に崖裾があったが、その後に崖面を削って下側の水田が拡張されたため、現状のような形で検出されたものと判断される。

谷底低地の土層堆積はこの境界から始まるが、2ヶ所の礫群付近は土層が他とは異なり、礫群の内部や礫群下には遺物を多く含む黒褐色の細かい堆積物層が認められた。この層は礫群付近にのみ堆積が認められ、他では全く認められない。またこの層は細かくは8層に分層できたが、間に灰オリーブ中粒砂層を挟んでいる。調査時にはこの層の上下で分けて、遺物の取り上げを行ったが、整理時に上下で接合できるものが多く、報告では一括して扱っている。

礫群付近以外での土層はグライ化して暗青灰色・暗オリーブ色・暗緑灰色を呈した砂層を中心であり、調査区奥の谷川に近い部分では砂礫層であった。これらの層では僅かに遺物を含む程度であり、礫群付近とは遺物の出土量の点でも全く異なる。

#### 2. 遺構

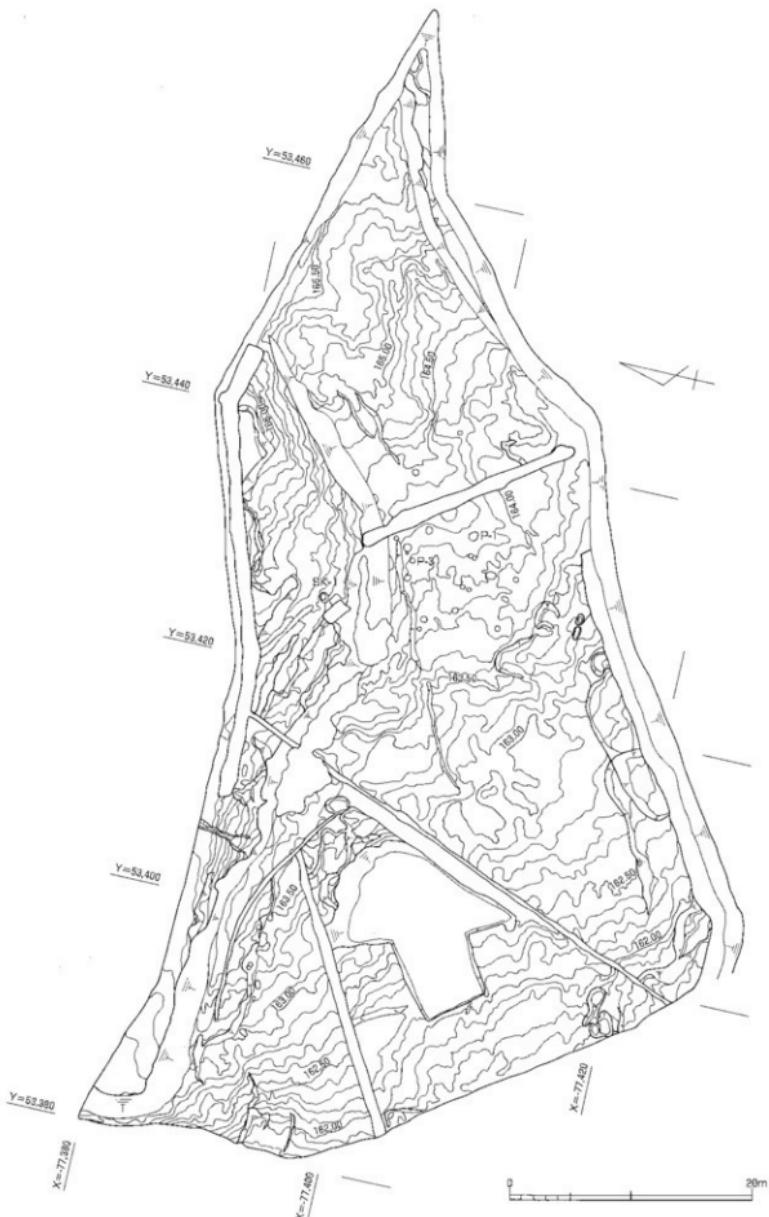
遺構は北端の段丘上と北側礫群から谷底低地の堆積物上で検出され、礫群に近い部分では段丘基盤層の黄褐色砂層上、谷底低地にあたる部分では灰色や青灰色の砂層上が遺構面であった。段丘上面では土壤1基が検出され、谷底低地に掛かる部分では柱穴約20個が検出された。この他、調査区西端の黒褐色砂層上でも小柱穴状のものが確認されたが、柱穴とは断定できなかった。

##### 柱穴

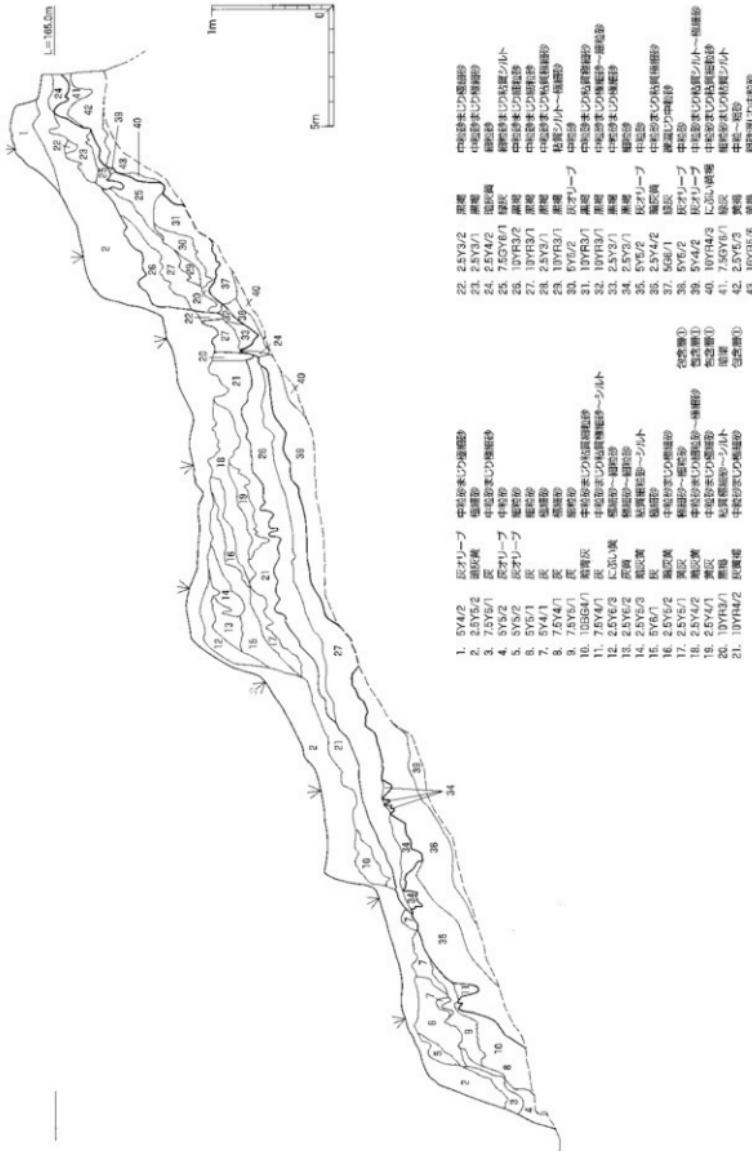
中央部で約20個が検出されたが、建物として復元できなかった。検出された柱穴の中の特徴的なもののみ列挙する。P-3は径35cm・深さ38cmで、内部に径23cmの柱根が残っていた。埋土は灰色シルトであった。P-1は55×50cmの楕円形を呈し、深さは約50cmを測る。柱引き抜き跡に礫と土師器梶類(5～7)が入れられていた。P-2は70×58cmの楕円形を呈し、深さは約55cmを測る。柱は抜き取られ、礫が詰め込まれていた。他に、P-8からは古墳時代の布留式土器が(1)、P-4からは平安時代の土師器小皿(3)が、P-11からは平安時代の土師器梶(4)とともに古墳時代の土師器壺(2)が出土している。

##### SK-1

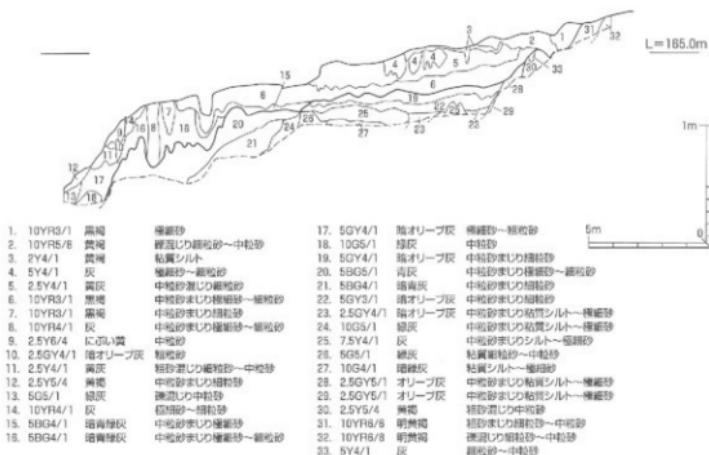
段丘が谷底低地へ落ち込む際で検出された径108cm・深さ82cmの円形の土壤である。埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色を呈する極細砂の三層であった。



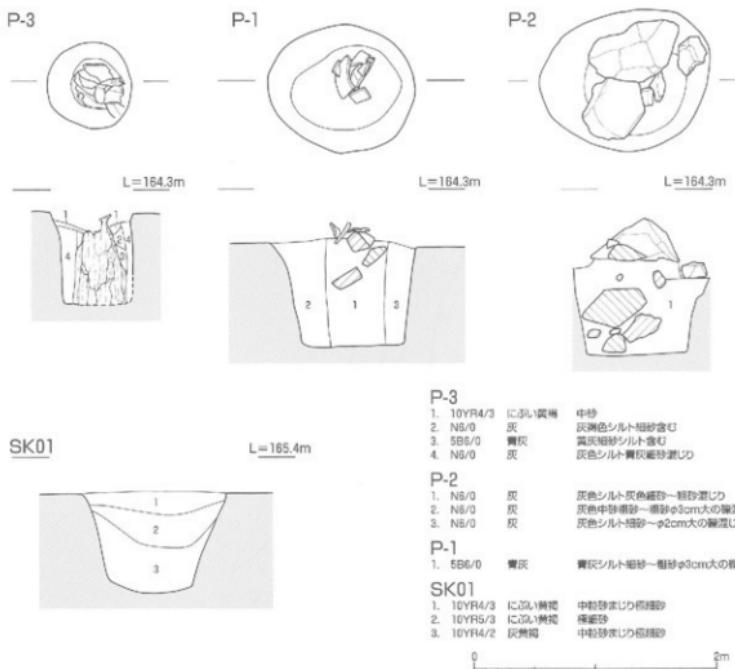
第3図 調査区全体図



第4図 土層断面図①



第5図 土層断面図②



第6図 遺構断面図

## 第2節 遺 物

### 1. 土 器

#### i. 遺構出土土器

土師器壺（1）

口縁部のみの小片である。口縁端部内面が肥厚する。P-8 出土。

土師器壺（2）

口径 10.8 cm。口縁から肩部までの破片で体部以下を欠く。体部外面はハケ、内面はヘラ削りで調整を行う。P-11 出土。

土師器皿（3）

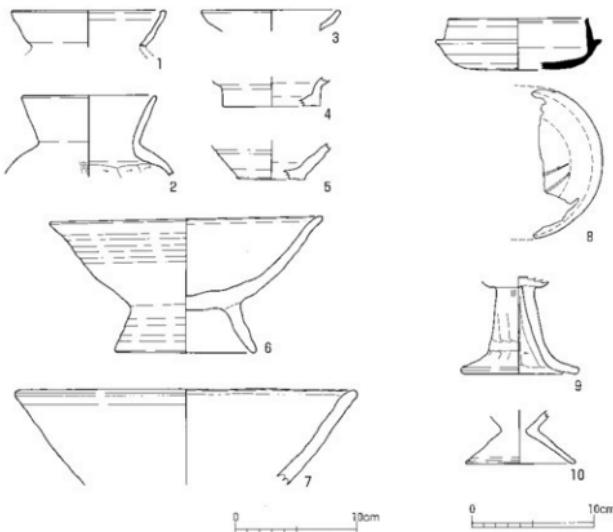
口縁部の小片である口縁部外面を強くなる。体部以下を欠いているので器形については判然としないが、一応小皿と考えておく。P-4 出土。

土師器碗（4～6）

4 は高台高 1.4 cm、底径 8.0 cm の底部片で、底部の切り離しは静止糸切りである。内面は体部と底部との間に段がつく。P-11 出土

5 は底径 5.6 cm の平底の底部片で、底部の切り離しは静止糸切りである。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。P-1 出土。

6 は口径 22.1 cm、器高 11.0 cm、底径 11.2 cm の台付きの椀である。体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。台部は高さ 4.1 cm で、ハの字状に踏ん張る。外面には成形時の段が残る。



第7図 遺構出土土器

第8図 古墳時代の土器

砂粒を多く含む。P-1 出土。

#### 土師質土器 (7)

径 27.6 cm。粘土縁の積み上げの痕が残る。内外面ともに指揮さえの凹凸が激しい。縁部のゆがみも著しく成形・調整は難である。口縁端部内面と外面に火を受けた痕跡が残る。P-1 出土。

#### ii. 包含層出土土器

##### 古墳時代の土器

###### 須恵器杯 (8)

口径 11.3 cm、器高 4.2 cm。口縁内端面に段をもつ。立ち上がりはほぼ直上方向に立ち上がる。底部のヘラ削りは受部近くまで施される。底面は平らで、外面にヘラ記号が刻まれている。

###### 土師器高杯 (9)

脚高 7.5 cm、脚径 8.9 cm。脚端部はほぼ水平に開く。内面はヘラで調整を施す。

###### 土師器小型器台 (10)

底径 8.6 cm。上部を欠く。

##### 奈良～平安時代の土器

###### 須恵器

###### 杯 E (11)

底部は平底で、ヘラ切り後にヘラ削りを施す。体部は丸く湾曲して立ち上がる。口縁部は外面を強くなでて細く仕あげる。

###### 杯 A (12～21)

体部と底部の境は明瞭で、体部は斜めに開き気味に立ち上がる。調整等の違いにより 3 つのタイプに分かれる。

1 つ目のタイプは底部がヘラ切り後、軽いナデで仕あげられる一群である。12～15 が該当する。口径は 12.8 cm～13.8 cm、器高は 3.3 cm～3.9 cm である。2 つ目のタイプは、底部外面はヘラ切り後、ヘラ状工具で調整を行う。体部内外面に火摺が顕著に残る一群である。16～19 が該当する。口径は 12.5 cm～13.0 cm、器高は 3.0 cm～3.5 cm である。3 つ目は左記の 2 つの群の須恵器に比べてやや雑な作りで、胎土にも白い大粒の石を多く含む一群である。ヘラ切り後、軽くなるのみである。口径は 11.6 cm～13.1 cm、器高は 3.1 cm～3.3 cm である。20 は全体が厚ぼったく、調整も悪い。21 は黒褐色を呈し、内面はコテ状工具で調整する。

###### 杯 B 蓋 (23～31)

つまみをもつ一群 (23～27) とつまみをもたない一群 (28～31) がある。つまみをもつ一群の天井部は口径 13.2 cm～15.4 cm で、ヘラ切りの後、ナデ調整を行い、ヘラ切り痕跡を消す。このうち 23、24 の天井部はやや丸く、わずかな甲盛りとなっているのに対して、25～27 の天井部は盛り上がりがほとんどなく扁平で、天井部と口縁部の境は屈曲し、段がつく。つまみをもたない一群は天井部が平坦で、縁部は外方に大きく開き、口縁端部の屈曲はわずかである。ヘラ切りの後、ナデ調整を行う。口径は 13.3 cm～13.6 cm である。

### 皿B 蓋 (32)

口径は 21.6 cm を測り、天井部はヘラ切りの後、ナデ調整を行い、ヘラ切り痕跡を消す。天井部外面の周縁部に重ね焼きの痕跡を残す。灰白色を呈し、胎土は精良である。

### 杯B (33 ~ 49)

器高が口径に比して低いもの (32 ~ 41) と高いもの (42 ~ 49) があり、器高の低い一群は口径 10.8 cm ~ 14.5 cm、器高 3.5 cm ~ 3.9 cm であるのに対して、高い一群は口径 10.8 cm ~ 17.9 cm、器高 4.7 cm ~ 7.4 cm である。器高の低い一群、高い一群ともに、48 を除いて、高台は幅が狭く、また、高さも低く、外方への踏ん張りがない。

### 皿C (50 ~ 59)

口径に対して器高が低く、高台をもたないものを皿C とする。次の 3 つのタイプがある。

1 つ目は口縁端部内面に圓線を巡らせる一群で、50 ~ 53 が該当する。いずれも底部外面はヘラ切りの後、ヘラ削りを施す。また、火拂が顯著に残るのが特徴である。52 と 53 は焼成が甘い。口径 13.7 cm ~ 16.8 cm、器高 2.2 cm ~ 2.5 cm。2 つ目のタイプは口縁部が平坦で、端部が外方に突出するタイプである。底部外面はヘラ切りの後、ヘラ削りを施す。54 が該当し、口径 14.1 cm、器高 2.1 cm である。3 つ目のタイプは口縁端部を丸く収める一群で、55 ~ 59 が該当する。体部は外反し、底部外面はヘラ切りの後、ナデ調整を施すのみである。胎土は粗く白い大粒の石を多く含む。口径は 13.0 cm ~ 13.4 cm、器高は 2.0 cm ~ 2.4 cm である。

### 皿D (60 ~ 66)

皿C に高台を付したものを皿D とする。2 つのタイプがある。1 つ目のタイプは口縁端部内面に圓線を巡らすもので、60 ~ 64 が該当する。底部外面はナデおよびヘラナデによる調整が行われている。61 は底部外面に火拂が顯著に残る。口径は 14.7 cm ~ 16.1 cm、器高は 2.4 ~ 3.1 cm である。2 つ目のタイプは 65 で、口縁端部を丸く収める。底部外面は軽いナデ調整を行なう。黒灰色を呈し、白い大きな石を含む。口径 14.7 cm、器高 2.8 cm を測る。

### 棲槐 (67 ~ 73)

器高 4.9 cm ~ 5.1 cm の浅手のタイプと器高 5.3 cm ~ 6.4 cm の深手のタイプがある。浅手のタイプには 67 と 68 がある。67 は口縁部内面に圓線を巡らし、7 mm ~ 8 mm の大粒の石を含む。68 は体部中央に圓線を巡らす。深手のタイプには 69 ~ 73 がある。口縁の形態には内面に段がつき受け口状になる一群 (67 ~ 72) と口縁端部を丸く収め外反するもの (73) がある。また、体部の後継が下位にあるもの (69 ~ 70) と中央部にあるもの (71 ~ 73) がある。

### 杯 (74)

口径に比して底径が小さく器高が高い。底部はヘラ切り後、ナデ調整を行う。7 mm ~ 8 mm の白い大粒の石を含む。

### 椀 (75)

割り出しの輪高台をもち、底部外面および高台脇はヘラ削りが施されている。口縁端部は内側に巻き込まれ、肥厚する。様窓の製品である。

### 椀 (179)

底部外面はヘラ切りの底面に輪高台を付す。高台は体部際に貼り付けられ、体部は直線的に斜め上方立ち上がる。内面に墨の磨り痕が残る。

### 椀C (79～88・180)

糸切りの平高台をもつ一群を椀Cとした。79は胎土も精良で硬質である。口縁部外反し、内外面とも成形時の段が激しい。高台の高さはほとんど平底に近い。体部は湾曲して立ち上がる。口縁部は外反する。80は高台高が0.5cmあり、側面をヘラで整える。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。81・82とともに底部を欠く。口縁部は81が外開きに立ち上がるのに対して、82は体部がやや丸みをもって立ち上がり、口縁部近くで角度を変えて直上方向に立ち上がる。83の高台は0.7cmと比較的高いが、高台側面はナデ調整のみである。84は口径(15.1cm)に比して高台は5.0cmと小さいが、比較的ていねいに作られている。口縁端面は平坦に仕上げる。85・86は高台側面にヘラの調整痕が明瞭に残る。85の内面にはコチ状工具による調整の痕が残る。87はほぼ完形である。体部はほぼ直線的に立ち上がり、底部は糸による切り離しのみで、高台側面の調整は省略している。180は高台側面をヘラによる調整が行われている。

### 鉢A (100)

口径19.7cmの口縁部のみの破片である。

### 壺A (89・90)

89は短く直立する口縁をもつ。体部はヘラで器面の最終調整を行なう。90は肩部の四方に耳をもつ。耳は残存しないが、痕跡が残されている。体部はナデ調整を行なうが、底部との境はヘラ削り調整が行われている。底部は円板作りで平底である。底部周縁部には製品を鍼繩から起こすためにヘラを差し入れて回転させた痕跡が残る。また、底面には窓壁塊が付着する。胎土に白い大粒の石を含む。

### 壺 (91～99・101～111)

91・92はともに壺口頭部である。91は口径9.7cmで、口縁部下端が外方に突出する。92は口径14.0cmで、口縁部は外に開き受け口状になる。口縁端部は上方に立ち上がる。93は体部が球形に近く、頭部がやや細い。閉塞円盤の痕跡が残る。103や105・106などの平底タイプの壺の口縁の可能性が高い。94は口が大きく開き、肩に稜をもつ壺Qである。95～98は卵形の体部に輪高台を付す。91のタイプの口頭部がつくものと思われる。96は体部の最下部に帯状の布痕が残る。同様の痕跡は加古川市中谷1号窯出土例に見られ、溝台の痕跡の可能性が高い。99は大きさからみて短頸壺の可能性が高い。

101は底部円板作りの平底で、周縁にヘラ切りの回転痕が残る。胎土は精良である。102も底部円板作りの平底で、周縁にヘラ切りの回転痕が残る。103は底部糸切りで、体部は倒卵形になる。体部の最下部に帯状の粘土付着痕が残る。同様の痕跡は加古川市投松6号窯出土例に見られ、96と同じ溝台の痕跡の可能性が高い。104も糸切りの平高台をもち、倒卵形の体部をもつ。106は左右に耳と2本の突帯をもつ双耳壺で、105のタイプの底部を有する器形である。105は平底で底部はナデ調整が施されている。

107～110は小型の瓶である。いずれも胎土は精良で作りもていねいである。107はやや受け口状の口縁部をもつたに対して108はやや細長い頭部をもち、口縁部は外反する。109・110とともに底部は糸切りである。108と109は同一個体になる可能性がある。111は口縁部を欠く。器壁の厚い小壺である。内面に漆が付着する。漆は生漆である。

### 平瓶 (112)

口頭部と底部を欠く。肩径22.2cm。把手は幅2.3cm、厚さ1.66cmの断面方形を呈し、片端は閉塞円板の上に接合されている。

### 横瓶（113）

口径 12.9 cm、体部径は 30.3 cm × 28.2 cm である。体部は片面閉塞で、閉塞部側を欠く。口縁端部は平坦で、体部全体に叩きを施した後、軽いかき目調整を行う。

### 甕（114～121）

大きく 3 つのタイプに分けることができる。甕 A は外反する口頭部をもつもので、116～121 が該当する。甕 A には 116～118 のように口縁端部を上方に引き上げるタイプや 120 と 121 のように口縁下端部が下方に突出するタイプ、および長い頭部を持ち、119 のように口縁端部を上方につまみあげるタイプがある。116～118 は口径 20.6 cm～24.6 cm で、外面には平行叩きを施す。120 は口径 21.0 cm、器高 28.5 cm の小型甕で、底部外面は叩きの後、ヘラ削りを施して調整している。121 は口径 41.4 cm の大型甕で、外面に平行叩きを施す。甕 B は内湾気味に立ち上がる口頭部をもつもので、115 が該当する。甕 C は短く立ち上がる広口の口頭部をもつもので、114 が該当する。

### 緑釉陶器素地（76・77・78・178）

いずれも須恵器質であるが、削り出しの高台をもち、内外面にヘラ磨きを施す。京都市大原野産か亀岡市篠窯産の可能性が高いが、断定はできない。76・77 は内外面ともヘラ磨きの痕を残す。底部外面はヘラ削りを行い、周縁から約 1 cm はいったところにヘラで幅 5 mm 前後の溝を掘っている。78 は周縁約 5 mm 幅を残して中心側が削り取られ、高さは低いが、削り出しの輪高台風に見せている。内外面ともヘラ磨きを施す。178 は削り出しの輪高台をもち、内面から底部外面に至るまで全体に磨きを施す。内面に漆の付着痕が残る。

### 土師器

#### 杯・皿（122～124）

高台径は 10.1 cm～12.4 cm を測るが、上部を欠くので、杯か皿かの区別は難しい。123・124 は高台幅が小さく、内面は赤色塗彩されている。

#### 小型杯（125～127・130）

口径 10.1 cm～10.8 cm、底径 4.6 cm～6.4 cm、器高 2.8 cm～3.2 cm の小型品である。椀・皿として分類も可能であるが、器高が低い点と底部の切り離しがヘラ切りによる点から、杯として扱うことにする。

#### 椀（128・131・132・133・134）

回転糸切りの平高台を伴う一群を椀として分類した。口径 9.3 cm の小型の椀（131）と口径 14.8 cm の大型の椀（132）がある。132 は高台側面をヘラで整形している。128 の内面には漆の付着痕の一部が残る。

#### 皿（129）

口径 14.3 cm、器高 1.7 cm を測る。体部内外面はヘラ磨きし、底部外面はヘラ削りにより調整を行う。

#### 甕（136～141）

136 から 140 は胎土・色調が共通しており、土師器鍋の赤褐色を呈する一群とも共通する。口縁端部の形状によって、口縁端部を摘みあげる 136・137・139、斜め上方に伸びた口縁端部を摘み上げる 140、口縁端部を摘み上げず面を持つ 138 の 3 種に分類できる。3 種とも調整は共通しており、体部外面は縱方向のハケ目調整、口縁部の内面は横方向のハケ目調整、体部内面はヘラ削りする。136～139 のハケ目は細かく、140 のハケ目は粗い。

141は口縁部が屈曲するもので、屈曲部が突出気味となる。口縁部外面には擬凹線状のものが施される。体部は肩部の張りは弱く、なだらかに最大径部に移行する。体部外面は細かな横向のハケ調整、内面はヘラ削りである。胎土は白っぽく細かい。最大径部と口縁部の外面に焦げが認められる。

#### 築（158～164）

胎土・調整によって2つに分かれる。1つ目の群は胎土が赤褐色を呈する一群で、158～162が該当する。外面は縱方向のハケ目調整を行い、内面はヘラ削りを行なう。このうち、158は口径38.1cmで、口縁端面は平坦に仕上げる。底部周辺は煤けている。160は口径38.8cmで、口縁端面は平坦に仕上げ、外面全体に煤が付着する。160は口径44.7cm、161は口径43.7cmで、ともに口縁端部を上方につまみあげ、頸部は縦ハケの後、横ナデ調整を行う。162は口縁端部のつまみ上げはあまり強くないが、160と161と同じ調整を行う。2つ目のタイプは黄褐色を呈するもので、163・164が該当する。外面に縱方向のハケ目調整を行い、内面は横方向のハケ目調整を行う。全体に成形時の凹凸が目立ち、口縁部の調整も粗雑である。

#### 黒色土器（142～157）

内面が黒色のA類と内外面が黒色のB類がある。内面が黒色のA類には142・143・146～148・153～157があり、薄手に作られ、内面は磨かれている。このうち、146～148は小さな輪高台が付されているのに対し、153～157は糸切りの平底である。内外面が黒色のB類には144・145・149～152がある。149・150には幅の狭い小さな輪高台がつく。151・152は糸切りの平高台をもつ。152の平高台は高さ0.7cmあり、高台側面もヘラで整形している。なお、A類・B類ともに内端面は沈線が引かれ、段状に仕上げている。

#### 縦釉陶器（165～172）

165は削り出しの輪高台をもつ。内外面は施釉されているが、高台の外面は露胎である。167～171は糸切りの底部の周縁部に幅1.75cm前後の粘土紐を貼り付けて整形した輪高台をもつ。高台裏も含めて内外面全体に施釉されている。166は須恵貿で、糸切り底に輪高台を付し、底部内面に團線を巡らす。高台底面より内側全体は露胎で、内面に2個の目跡を残す。168は底部の内外の同じ位置に長さ4cm前後、幅0.5cm前後の細長い粘土の被覆痕が認められる。被覆粘土の上面に縦釉がかけられていることから、製品の乾燥段階ではいったヒビの修復痕と判断される。169は土師質で、底部内面に團線を巡らす。

172は軟質で、低い平高台をもつ。全体に磨滅しており、淡い縦釉がところどころ残る。洛北、あるいは洛西産の可能性が高い。

166～169・171は糸切りの底部に輪高台を貼り付けており、東海系と判断され、165は確か大原野、170は大原野、172は洛北か洛西の産の可能性が高い。

#### 灰釉陶器（173～177・206～210）

いずれも破片で口縁部から底部まで接合できたものはなかった。口縁部片はいずれも外反し、内外面はハケ塗りである。また、底部片はいずれも三日月高台である。尾野善裕氏よりこれらの破片はいずれも美濃産でK90新からO53段階の可能性が高いとの教示を得た。

### 白磁 (211)

華南産と思われる白磁の破片である。小片のため器形ははっきりしないが碗である可能性が高い。

### 墨書き土器 (181 ~ 189)

記号の可能性あるものも含めて9点が出土している。9点とも皿や杯の底部外面に墨書きされたものである。181は皿の底部外面に「福集」と記載され、「集」の下部には記載はないが、「福」の上部は欠けており、不明。182は字の上半分を欠いているが、181の字体に類似していることから「集」と読めそうである。184は下の字は「マ(部)」であるが、上の字は下端部のみであり不明。185は皿Aの底部外面に記載され、「神マ(部)」と読める。神部は、但馬では他に、栗鹿遺跡出土の墨書き土器や加都遺跡あるいは豊岡市(旧出石町)宮内黒田遺跡出土木簡にもみえる氏族名であり、考古遺物として4例目である。また『栗鹿大(明)神元記』にも神部の記述があり、神部は但馬ではかなり広範に活躍していたようである。187は一字目は「小」と読めるが、二字目は下半を書いている。一応「田カ」としておく。「小田」という記載は隣接の柴遺跡出土の墨書き土器の中にも多くみられるようである。189は杯Bの底部外面に記載されたものであるが、左半分を欠く。一応「南カ」としておくが、二文字あるかもしれない。186は「岡カ」、188は判読できない。

表2 墨書き土器一覧表

報告No	文 字	器 種	出土構造	備 考
181	福集	皿 (底部裏面)	—	
182	□(集カ)	?	(底部裏面)	—
183	十	?	(底部裏面)	—
184	□マ	?	(底部裏面)	—
185	神マ	皿 A	(底部裏面)	—
186	□(岡カ)	?	(底部裏面)	—
187	小田	皿	(底部裏面)	—
188	□	平瓶?	(底部裏面)	—
189	□(南カ)	杯 A	(底部裏面)	—

## 2. 土製品

製塙土器と土錐が出土している。製塙土器は既に図化した以外にもあり、比較的多く出土している。190~192は製塙土器であり、口縁部が肥厚し、内湾して端部が面状となる190・191と、口縁部が薄く、端部が尖り気味となる192がある。いずれもナデ整形であり、内外面に指ナデの痕跡を残す。190・191は運搬用に、192は製塙と運搬の両方で使用されるもので、奈良時代までの時期が考えられるものである。

193~199は中央が膨れた円柱形の土錐であり、若干長さの違いはあるものの、ほぼ4cm前後で揃っている。太さは1.3~1.7cmを測る。

200は何らかの脚と思われる。上端は剥離し、下端は生きている。長さ4.2cm、太さ1.0cm、ナデによる整形である。

### 3. 木製品

掛矢（W1）の他、付札状木製品（W2）・馬形（W3）かと思われる製品と柱根が出土している。掛矢（W1）は全長32cm、身は長さ17.6cm・太さ9cm、柄は長さ15cm・太さ3.6cmであり、身の中央が窪んだり、中央から先端が削れており、特に中央の痛みが激しいことから横槌ではなく掛矢とした。樹種の同定はしていないが広葉樹と思われる。

W2は付札木籠状木製品と思われるもので、長さ23.4cm・幅3.4cm・厚さ4mmである。表裏は平らに削っている。頂部は水平に切り、頭部には両側辺部に下方からの切込みがある。両切込み部を驚くほどに墨痕状の盛り上がりがあり、その上にも斜めに上がる同様の痕跡が認められる。切込みから上の両側辺は丸く、中央はやや膨らみ、下端は両側から削り込んで尖らせている。形状だけでみれば付札状の木籠である可能性が高いが、墨書きは認められない。針葉樹（スギか？）と思われる。

W3は馬形の頭部状の製品であるが、身部を欠いているため不明。針葉樹（スギか？）と思われる。

W4はP-3から出土した柱根である。最大径23cmであり、一部に樹皮が残っていた。柱の底面は手斧と思われるハツリ痕を明瞭に残す。針葉樹と思われる。

### 4. 金属製品

M1は薄い板状の鉄製品であり、右端に近い部分に小孔が穿たれている。錆化が激しく、周囲は遺存していない。不明品である。

### 5. 石製品

S1は石製の蛇尾である。半分以下の残決であるが、上辺と側辺が遺存し、裏面には紐孔が半裁された形で遺存している。残存部分での大きさは長さ55cm・幅2.9cm・最大厚8mmを測る。側片部分の厚さは7mmとやや薄くなっている。上辺は右側辺に向けて下がり、上辺と側辺の角は丸く仕上げている。表面が裏面より小さく、側面は裏面から表面に傾斜しており、断面は台形状となる。研磨は表面と側面が黒く光沢が出るほどに仕上げ、表面と側面の角はシャープに仕上げている。裏面は省力され、研磨はしているが、光沢が出るまでにはしていない。裏面と側面の境は角を磨いて面取りしている。紐孔は2個一対で、裏面の一箇所のみ遺存している。紐孔は中心で3.5mmの間隔を測り、2個の中心に向かって斜めに穿たれている。石材は黒色頁岩と思われる。

S2は扁平片刃石斧の基部のみ遺存している。凝灰岩を用いている。S3は磨石である。側面に帯状に敲打部が形成されている。石材は安山岩と思われる。

S4の円石は表裏の平坦面に集中的な敲打痕が認められる。砂岩と思われる。S5の砾石は長方体に近い整った形に整形されている。長軸方向の3面を砥面として利用し、シャープな擦痕が見られ凝灰岩が用いられている。

表3 出土遺物観察表

報告番号	図版番号	種別	器種	法量(cm)			備考1
				口径	器高	底径	
1	拂図1	土師器	甕(口縁)	(12.4)	—	—	
2	拂図1	土師器	壺	(10.75)	—	—	
3	拂図1	土師器	小皿	(11.2)	—	—	
4	拂図1	土師器	楕	—	—	(8.0)	系切り
5	拂図1	土師器	楕	—	—	(5.6)	系切り
6	拂図1	土師器	楕	22.1	11.0	11.2	
7	拂図1	土師器	? (口縁)	(27.6)	7.8	—	
8	拂図2	須恵器	杯	(11.3)	4.2	—	
9	拂図2	土師器	高杯	—	8.05	—	
10	拂図2	土師器	器台	—	—	(8.6)	
11	1	須恵器	杯	(14.45)	4.5	(7.4)	
12	1	須恵器	杯A	13.7	3.85	8.8	
13	1	須恵器	杯A	(13.8)	3.45	(10.3)	
14	1	須恵器	杯A	(12.75)	3.25	(9.6)	
15	1	須恵器	杯A	(12.75)	3.35	9.95	
16	1	須恵器	杯A	(12.8)	3.5	(9.3)	
17	1	須恵器	杯A	(12.5)	3.5	(9.1)	
18	1	須恵器	杯A	(12.95)	3.3	(9.15)	
19	1	須恵器	杯A	(12.8)	3.0	(9.7)	
20	1	須恵器	杯A	13.1	3.3	8.8	
21	1	須恵器	杯A	(11.8)	3.3	(7.8)	
22	1	須恵器	杯A	(11.6)	3.1	(8.0)	
23	1	須恵器	杯A蓋	(14.2)	—	—	
24	1	須恵器	杯A蓋	(15.4)	—	—	
25	1	須恵器	杯A蓋	(14.7)	—	—	
26	1	須恵器	杯A蓋	(13.6)	—	—	
27	1	須恵器	杯A蓋	(13.2)	—	—	
28	1	須恵器	杯A蓋	(13.6)	—	—	
29	1	須恵器	杯A蓋	(13.3)	—	—	
30	1	須恵器	杯A蓋	(13.4)	—	—	
31	1	須恵器	杯A蓋	(13.5)	—	—	
32	1	須恵器	杯B蓋	(21.6)	—	—	
33	1	須恵器	杯B	(10.75)	3.65	(6.4)	
34	1	須恵器	杯B	(12.8)	4.8	(8.3)	
35	1	須恵器	杯B	(12.8)	3.5	(8.7)	
36	1	須恵器	杯B	12.55	3.15	10.1	
37	1	須恵器	杯B	13.0	3.85	9.9	
38	1	須恵器	杯B	(12.7)	3.25	(8.5)	
39	1	須恵器	杯B	(13.6)	3.65	(8.9)	
40	1	須恵器	杯B	(13.45)	3.8	(10.85)	
41	1	須恵器	杯B	(14.5)	3.9	(9.6)	
42	1	須恵器	杯B	(14.6)	4.7	(10.1)	
43	1	須恵器	杯B	(10.8)	5.5	(6.2)	
44	1	須恵器	杯B	(11.6)	4.8	(6.0)	
45	1	須恵器	杯B	(12.8)	5.05	(8.8)	
46	1	須恵器	杯B	(13.6)	5.25	(7.7)	
47	1	須恵器	杯B	—	—	8.8	
48	2	須恵器	楕	(17.1)	7.35	(11.45)	
49	2	須恵器	楕	(17.9)	6.35	(11.2)	
50	2	須恵器	皿C	(13.7)	2.35	(10.4)	
51	2	須恵器	皿C	(13.75)	2.5	(12.15)	
52	2	須恵器	皿C	(16.8)	2.45	(15.1)	
53	2	須恵器	皿C	(16.4)	2.2	(13.0)	
54	2	須恵器	皿C	14.1	2.1	12.2	
55	2	須恵器	皿C	13.15	2.4	12.2	
56	2	須恵器	皿C	(13.0)	2.0	(10.75)	
57	2	須恵器	皿C	(13.2)	2.2	10.9	

報告番号	図版番号	種別	器種	法量(cm)			備考 I
				口径	器高	底径	
58	2	須恵器	皿 C	(13.4)	2.4	10.8	
59	2	須恵器	皿 C	(11.6)	1.85	(9.05)	
60	2	須恵器	皿 D	(14.7)	3.05	(10.8)	
61	2	須恵器	皿 D	(16.0)	2.8	13.35	
62	2	須恵器	皿 D	16.4	3.0	(12.6)	
63	2	須恵器	皿 D	(16.1)	2.75	(12.1)	
64	2	須恵器	皿 D	(16.0)	2.35	(12.5)	
65	2	須恵器	皿 D	(14.7)	2.8	(11.0)	
66	2	須恵器	皿 D	—	—	11.2	
67	2	須恵器	縹碗	(15.6)	4.85	9.1	
68	2	須恵器	縹碗	(17.0)	5.1	(9.2)	
69	2	須恵器	縹碗	(15.6)	5.7	(9.45)	
70	2	須恵器	縹碗	(17.15)	5.7	(8.8)	
71	2	須恵器	縹碗	(16.3)	5.3	(10.4)	
72	2	須恵器	縹碗	(16.8)	6.0	10.3	
73	2	須恵器	縹碗	(16.9)	6.4	(10.5)	
74	2	須恵器	杯	(13.1)	4.25	(6.1)	
75	2	須恵器	杓	(17.1)	7.05	(6.65)	削り出し高台
76	2	縹軸蓋地	杓	(11.2)	3.75	(5.9)	削り出し高台
77	2	縹軸蓋地	杓	11.5	4.1	6.4	削り出し高台
78	2	縹軸蓋地	杓	—	2.5	(7.7)	削り出し高台
79	2	須恵器	杓 C	(12.3)	4.25	(5.65)	
80	2	須恵器	杓 C	(13.5)	4.7	(5.6)	
81	2	須恵器	杓 C	(13.3)	—	—	糸切り
82	2	須恵器	杓 C	(12.5)	—	—	糸切り
83	2	須恵器	杓 C	(15.1)	5.35	6.9	糸切り
84	2	須恵器	杓 C	(15.05)	5.7	(5.0)	糸切り
85	2	須恵器	杓 C	—	—	6.9	糸切り
86	2	須恵器	杓 C	—	—	(6.2)	糸切り
87	2	須恵器	杓 C	15.0	4.85	6.8	糸切り
88	2	須恵器	杓 C	—	—	5.8	糸切り
89	3	須恵器	壺 A	(12.7)	14.7	—	
90	3	須恵器	壺 A	(10.9)	19.0	12.8	四耳壺
91	3	須恵器	壺(口縁)	(9.65)	—	—	
92	3	須恵器	壺(口縁)	(14.0)	—	—	
93	3	須恵器	壺	—	—	(7.9)	
94	3	須恵器	壺 Q	—	—	—	
95	3	須恵器	壺	—	—	(7.9)	
96	3	須恵器	壺	—	—	10.0	混合痕
97	3	須恵器	壺	—	—	—	
98	3	須恵器	壺	—	—	(11.2)	
99	3	須恵器	壺	—	—	(16.5)	
100	2	須恵器	鉢 A	(19.7)	—	—	
101	4	須恵器	壺	—	—	(13.2)	
102	4	須恵器	壺	—	—	9.6	糸切り
103	4	須恵器	壺	—	—	(9.8)	糸切り
104	4	須恵器	壺	—	—	(7.0)	糸切り
105	4	須恵器	壺	—	—	11.5	
106	4	須恵器	双耳壺	—	5.75	—	
107	4	須恵器	小型壺(口縁)	(4.35)	—	—	
108	4	須恵器	小型壺(口縁)	(3.4)	—	—	
109	4	須恵器	小型壺(体部)	—	—	(4.0)	糸切り
110	4	須恵器	小型壺(体部)	—	—	(4.2)	糸切り
111	4	須恵器	壺	—	7.4	(5.9)	漆付着
112	4	須恵器	平瓶	—	—	—	
113	4	須恵器	横瓶	(12.9)	(30.3)	—	
114	5	須恵器	壺 C	(42.2)	—	—	

報告番号	図版番号	種別	器種	法量(cm)			備考 1
				口径	器高	底径	
115	5	須恵器	甕 B	(22.7)	7.65	-	
116	5	須恵器	甕 A	(24.6)	-	-	
117	5	須恵器	甕 A	(24.6)	-	-	
118	5	須恵器	甕	(20.5)	-	-	
119	5	須恵器	甕	(37.0)	-	-	
120	5	須恵器	甕 A	(20.85)	28.45	-	
121	5	須恵器	甕 A	(41.4)	-	-	
122	6	土師器	高台	-	2.05	(12.4)	
123	6	土師器	高台	-	1.5	(11.8)	
124	6	土師器	高台	-	1.1	(10.1)	
125	6	土師器	杯	(10.8)	3.2	(6.35)	ヘラ切り
126	6	土師器	杯	(10.1)	3.2	(4.55)	ヘラ切り
127	6	土師器	杯	-	3.0	(6.05)	ヘラ切り
128	6	土師器	杯	-	2.65	6.5	糸切り
129	6	土師器	皿	(14.3)	1.7	(9.4)	ヘラ削り
130	6	土師器	杯	(10.1)	2.8	(5.8)	ヘラ削り
131	6	土師器	椀	(9.25)	4.2	(5.0)	糸切り
132	6	土師器	椀	(14.8)	5.0	(6.6)	糸切り
133	6	土師器	杯	-	2.15	(7.0)	糸切り
134	6	土師器	杯	-	2.2	5.7	糸切り
135	6	土師器	碗	(12.3)	4.65	6.1	ヘラ切り
136	6	土師器	甕	(16.1)	-	-	
137	6	土師器	甕	(15.65)	-	-	
138	6	土師器	甕	(19.1)	-	-	
139	6	土師器	甕	(19.7)	-	-	
140	6	土師器	甕	(22.65)	-	-	
141	6	土師器	甕	-	-	-	
142	6	黒色土器	杯	(10.6)	2.7	-	内黒
143	6	黒色土器	椀	(13.25)	-	-	内黒
144	6	黒色土器	椀	(14.4)	-	-	内黒
145	6	黒色土器	椀	(13.8)	-	-	内黒
146	6	黒色土器	椀	-	-	(8.6)	内黒
147	6	黒色土器	椀	-	-	(6.6)	内黒
148	6	黒色土器	椀	-	-	(6.4)	内黒
149	6	黒色土器	椀	-	-	(6.8)	両黒 糸切り
150	6	黒色土器	椀	-	-	(4.8)	両黒 糸切り
151	6	黒色土器	椀	-	-	(6.3)	両黒 糸切り
152	6	黒色土器	椀	-	-	(5.6)	内黒
153	6	黒色土器	椀	-	-	(6.4)	内黒
154	6	黒色土器	椀	-	-	6.2	内黒
155	6	黒色土器	椀	-	-	5.7	内黒
156	6	黒色土器	椀	-	-	(6.0)	内黒
157	6	黒色土器	椀	-	-	5.0	内黒
158	7	土師器	瓶	(38.1)	-	-	
159	7	土師器	瓶	(38.8)	-	-	
160	7	土師器	瓶	(44.7)	-	-	
161	7	土師器	瓶	(43.7)	-	-	
162	7	土師器	瓶	(45.6)	-	-	
163	7	土師器	鍋	(47.6)	-	-	
164	7	土師器	鍋	(39.5)	-	-	
165	2	縹緥陶器	椀	(14.1)	5.0	(7.25)	
166	8	縹緥陶器	碗	-	4.95	8.5	
167	8	縹緥陶器	椀(高台)	-	1.4	6.5	
168	8	縹緥陶器	椀(高台)	-	1.85	6.8	
169	8	縹緥陶器	椀(高台)	-	1.8	7.0	
170	8	縹緥陶器	椀(高台)	-	1.1	7.0	
171	8	縹緥陶器	椀(高台)	-	1.29	7.3	

報告番号	図版番号	種別	器種	法量(cm)			備考 I
				口径	器高	底径	
172	8	縦瓶陶器	楕(高台)	—	1.7	6.15	
173	8	灰釉陶器	楕	(17.6)	3.5	—	
174	8	灰釉陶器	楕	(16.8)	3.7	—	
175	8	灰釉陶器	楕	(16.5)	1.35	—	
176	8	灰釉陶器	楕(高台)	—	1.35	(7.2)	
177	8	灰釉陶器	楕(高台)	—	1.55	(6.8)	
178	8	縦椭素地	楕	—	3.15	7.4	転用瓶
179	8	須恵器	楕	—	2.3	7.4	転用瓶
180	8	須恵器	楕	—	2.05	6.35	転用瓶
181	8	須恵器	皿(墨書き)	—	—	—	
182	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
183	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
184	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
185	8	須恵器	皿(墨書き)	(15.8)	2.45	(14.25)	
186	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
187	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
188	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
189	8	須恵器	墨書き	—	—	—	
190	9	土師器	製塙土器	(11.2)	6.95	—	
191	9	土師器	製塙土器	(13.0)	6.15	—	
192	9	土師器	製塙土器	(13.0)	4.7	—	
193	9	土師器	土鍤	長4.0	幅1.55	厚1.4	
194	9	土師器	土鍤	長3.8	幅1.6	厚1.5	
195	9	土師器	土鍤	長4.2	幅1.35	厚1.3	
196	9	土師器	土鍤	長4.3	幅1.55	厚1.45	
197	9	土師器	土鍤	長3.6	幅1.5	5厚1.4	
198	9	土師器	土鍤	長3.95	幅1.55	厚1.45	
199	9	土師器	土鍤	長4.0	幅1.45	厚1.4	
200	9	土師器	脚部	長5.3	幅2.4	厚2.0	
201	写真のみ	須恵器	? (漆付奢)	—	3.05	—	
202	写真のみ	黒色土器	杯(口縁)	—	—	—	
203	写真のみ	黒色土器	杯(高台)	—	—	—	
204	写真のみ	黒色土器	杯(高台)	—	—	—	
205	写真のみ	黒色土器	杯(LJ縁)	—	—	—	
206	写真のみ	灰釉陶組器	楕	—	—	—	
207	写真のみ	灰釉陶組器	楕	—	—	—	
208	写真のみ	灰釉陶組器	楕	—	—	—	
209	写真のみ	灰釉陶組器	楕	—	—	—	
210	写真のみ	灰釉陶組器	楕	—	—	—	
211	写真のみ	白磁	楕	—	—	—	
212	写真のみ	土師器	土鍤	長2.0	幅1.35	厚1.1	
W1	9	木器	杵	長22.55	幅9.2	厚6.9	
W2	9	木器	木箋	長23.3	幅3.35	厚0.4	
W3	9	木器	馬型?	長2.2	幅9.95	厚0.95	
W4	9	木器	柱	長35.75	幅23.6	厚18.7	
M1	10	鐵器	?	長7.0	幅3.3	厚0.25	
S1	10	石器	SB	長5.55	幅3.05	厚0.8	
S2	10	石器	AX	長5.25	幅7.15	厚1.07	
S3	11	石器	SW?	長8.4	幅7.7	厚4.75	
S4	11	石器	SH	長9.05	幅8.2	厚5.05	
S5	11	石器	WS	長17.25	幅7.65	厚5.95	
		須恵器	杯B	—	1.5	(8.75)	
		須恵器	杯B	—	1.42	(8.1)	
		須恵器	平瓶(取手)				184と同一個体

## 第4章 まとめ

### 1. 遺構

本遺跡の地形は段丘と段丘下の谷底低地からなり、段丘は調査区の北端に細長く検出され、調査区の大部分は谷底低地の沖積地にある。遺構や遺物がまとまって出土した範囲は調査区中央の極めて狭い範囲であり、遺跡は極めて小規模なもので、今回の調査で遺跡全体が調査が出来たものと思っている。

検出された遺構は僅かで、柱穴と思われるピット20個と土壙が検出されたのみである。その中には径が23cm。やや太い柱根が残っていたものや、明らかに柱の引き抜きが行われたと思われるものなどがあるが存在するが、いずれも掘立柱建物として復元はできず、ピットの性格は不明と言わざるをえない。

また段丘地形と谷底低地の境界である斜面部には礫が集中して多量に投棄されていた。人工的に敷き詰めたと見られる部分もなきはないが、礫上面は平坦ではないこと、礫群に隙間が多くあることなどから、人為的に敷いたものではなく、投げ入れられた状態に近いと考えている。礫群の上面は谷底低地に向けて傾斜しており、段丘側から投棄されたものと判断される。

この礫群の中や礫群の下からは比較的多くの遺物が出土し、本遺跡の調査で出土した遺物の大部分は礫群の周辺で出土したものである。調査区内では礫群周辺以外にはほとんど土器は出土していないといつても過言ではない。ただ礫群の上・中・下で包含層を分け、遺物を取り上げてみたが、整理段階では上中下で接合できる土器が比較的多くあることが判明している。これは土器が礫とそれほど間をおかず、あるいは一度に礫とともに廃棄された可能性が高いことを表している。

### 2. 遺物

出土した遺物は土器類・木製品・鉄製品・石製品であり、土器類は須恵器・土師器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・磁器で構成される。時期的な関係を考慮しないで土器類の構成比率をみると、図化したものでは須恵器約68%・土師器約15%・黒色土器8%・施釉陶器9%となっている。須恵器は小片を省略し、施釉陶器や黒色土器はかなり小片まで扱っていることから、実際の構成比率よりは須恵器が低く、施釉陶器や黒色土器が高くなっているが、土器では須恵器が主な容器となっている。

土器の年代については詳細な時期検討を行っていないが、壺・壺類を除く供膳形態の須恵器類は杯A・杯B類・皿C・皿D・棱碗で構成され、それに碗・椀C・綠釉陶器素地が加わる。杯A・杯B類・皿C・皿D・棱碗については、まだ律令期の形態を残しているが、杯B蓋にツマミが付かないものが含まれており、ほぼ平安京II古段階までの範囲にあるものであろう。II古段階は870年頃までとされており、9世紀後半までの時期が与えられる。この律令期形態を残す須恵器の器種の中では棱碗が多い。碗75と綠釉陶器素地は京都府の縦産であり、形態的には西長尾3号窯に近いものである。西長尾3号窯は10世紀前半に位置づけられている。

椀C類については83以外は糸切り平高台の側面調整を省略しており、基本的には時期が下がり、211の白磁等と並行するものであろう。

施釉陶器の内、灰釉陶器は三日月高台であり、K90ないしはO53に該当し、10世紀の前半に位置づけられる。綠釉陶器は、172が洛北あるいは洛西産でII古段階に、それ以外は個別に記したように東海あるいは東海系と大原野ないしは縦産と思われるものであり、II新～III古段階に位置づけられ、これもほぼ10世紀前半までの年代が与えられている。

土師器については 122～124 の杯か皿の底部と 129 の皿は基本的には律令期に属するものであり、Ⅱ期古段階までの須恵器に供伴するもので、122～124 の底部はその中でも比較的古い段階に属するものであろう。125～128・130～134 の杯あるいは椀は輦輪整形された所謂クロ土師器であり、年代の決め手となるような一括資料は乏しい。したがって年代を決定しにくいか、たつの市小丸遺跡の瓦溜めから出土した土師器類に類似するところもあり、仮に 11 世紀前半までとしておく。

このように今回出土した土器は 9 世紀から 11 世紀前半までの年代が与えられるものである。

### 3.まとめ

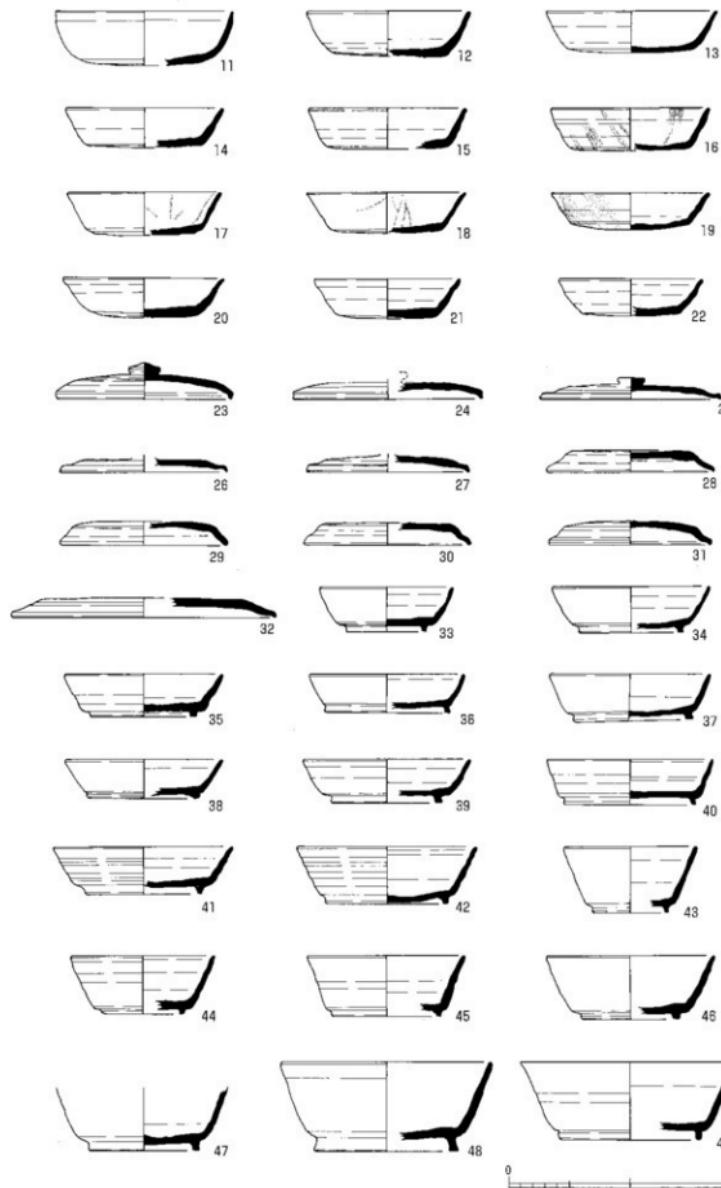
今回の調査では遺構は僅かであったが、出土遺物は一部年代が下がるものも含まれているが、9 世紀～11 世紀前半頃までに位置づけられるものあり、その中には墨書き土器・施釉陶器・稜輪あるいは付札木簡状木製品等が含まれている。こうした遺物が出土したこと、直ちに官衙遺跡と関連付けられるとは思わないが、出土量の割にはこうした遺物が多いこと、やはり遺跡の位置関係であろう。柴遺跡が山陰道の栗鹿駅に比定されるとすれば、本遺跡は駅背後の谷筋であり、官衙から出土することが多い遺物の存在も駅との関係無しでは語れないであろう。

#### 参考・引用文献

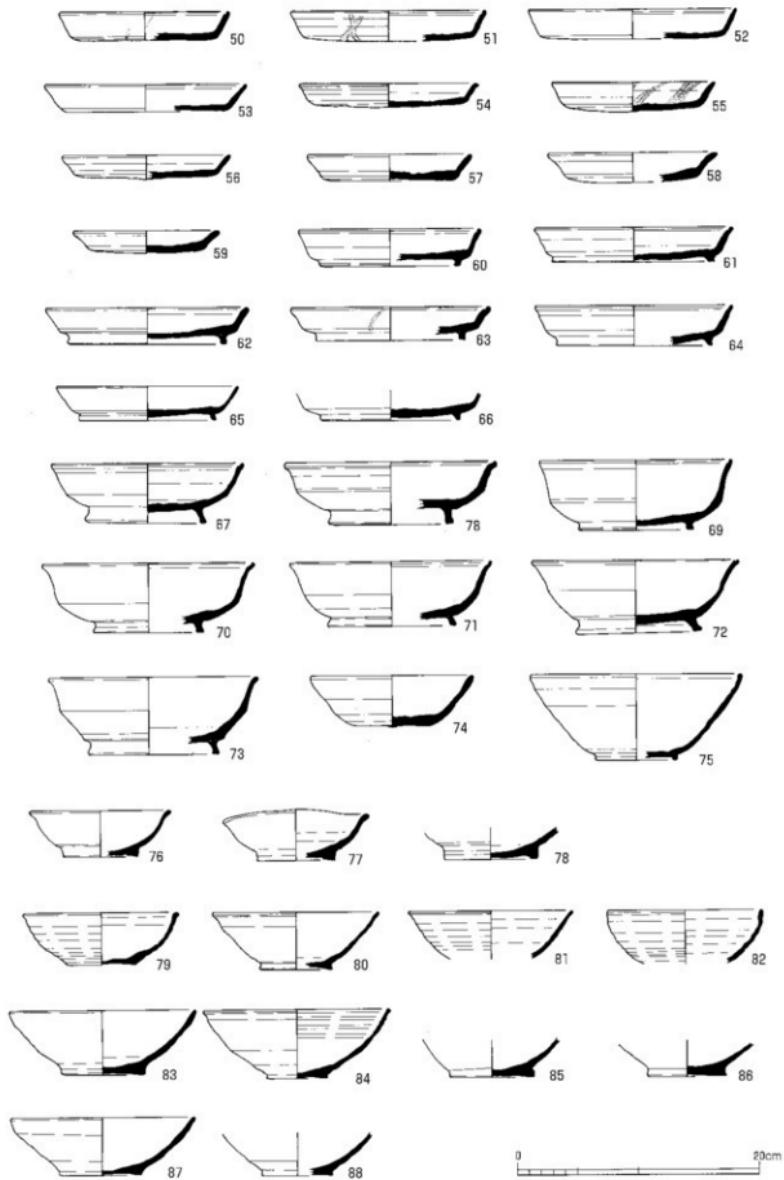
- 生田隆・足立裕 「古道と城・邑・神社」2005  
田畠 基 「考古学からみた和田町」『和田町史 上巻』 和田町史編纂委員会2004  
別府洋二 「加都遺跡」『木簡研究20』1998  
岸本一宏・甲斐秋光「加都遺跡」『木簡研究21』1999  
中島雄二 「釣坂遺跡」『木簡研究21』1999  
西口圭介 「柴遺跡」『木簡研究22』2001  
兵庫県教育委員会『兵庫県道路地図』2004  
『栗鹿遺跡』2007  
『加都遺跡 I』2005  
『加都遺跡 II』2007  
山東町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会『西谷古墳群・追間古墳群』1979  
山東町教育委員会『三保東山古墳』1981  
和田町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会『和田町の古墳』1993  
朝来町教育委員会『朝来町歴史探訪 朝来町史上巻』1977  
龍野市教育委員会『布勢駅家 II』1994  
そのほか、須恵器・施釉陶器の年代観については歴史土器研究会の皆さんにご教示頂いた。

図 版

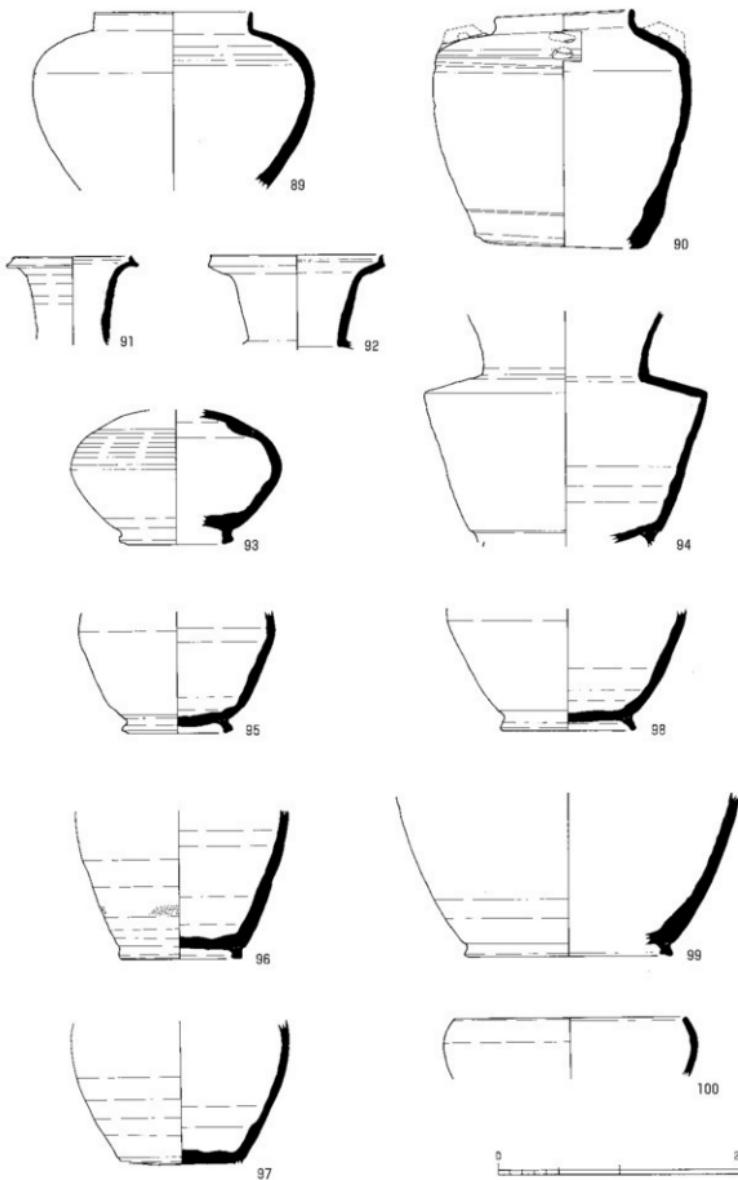
写 真 図 版



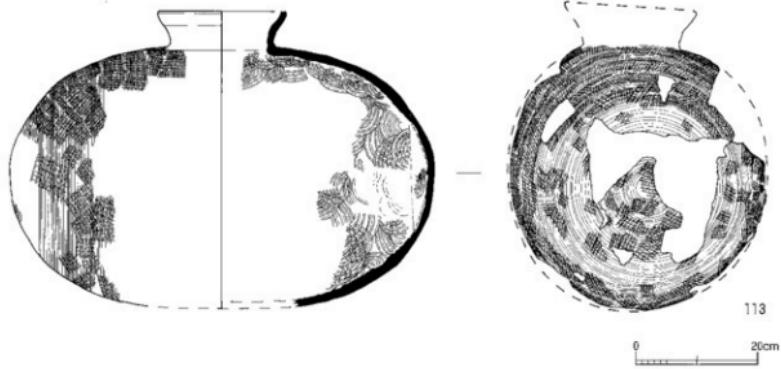
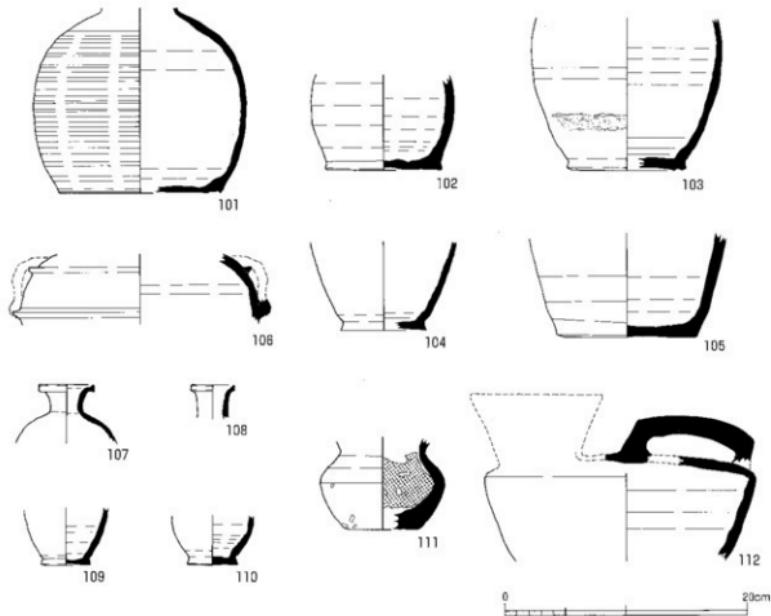
出土遺物 1



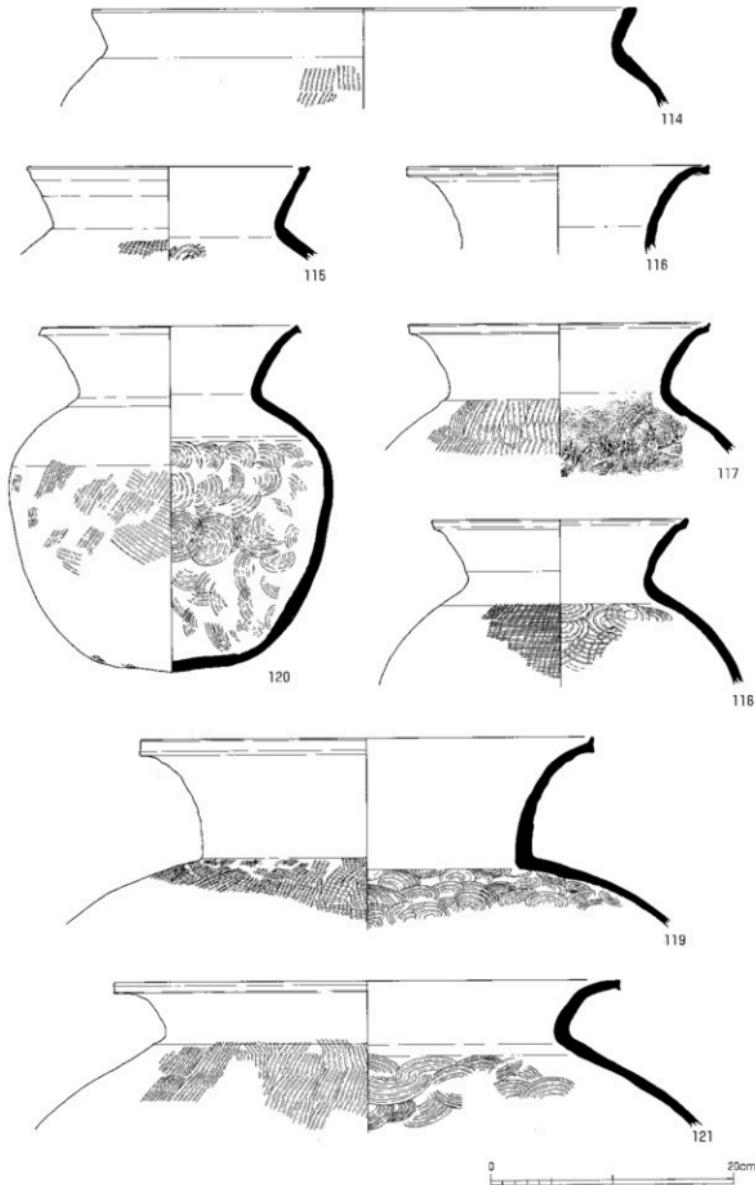
出土遺物2



図版4

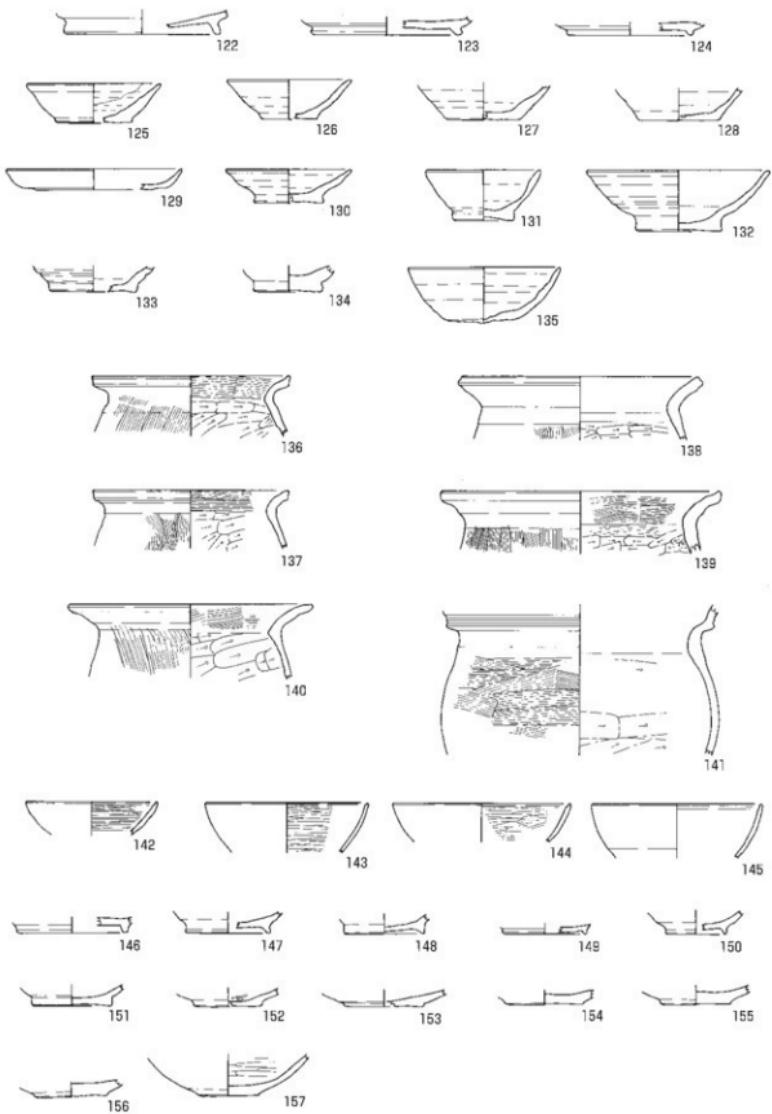


出土遺物 4



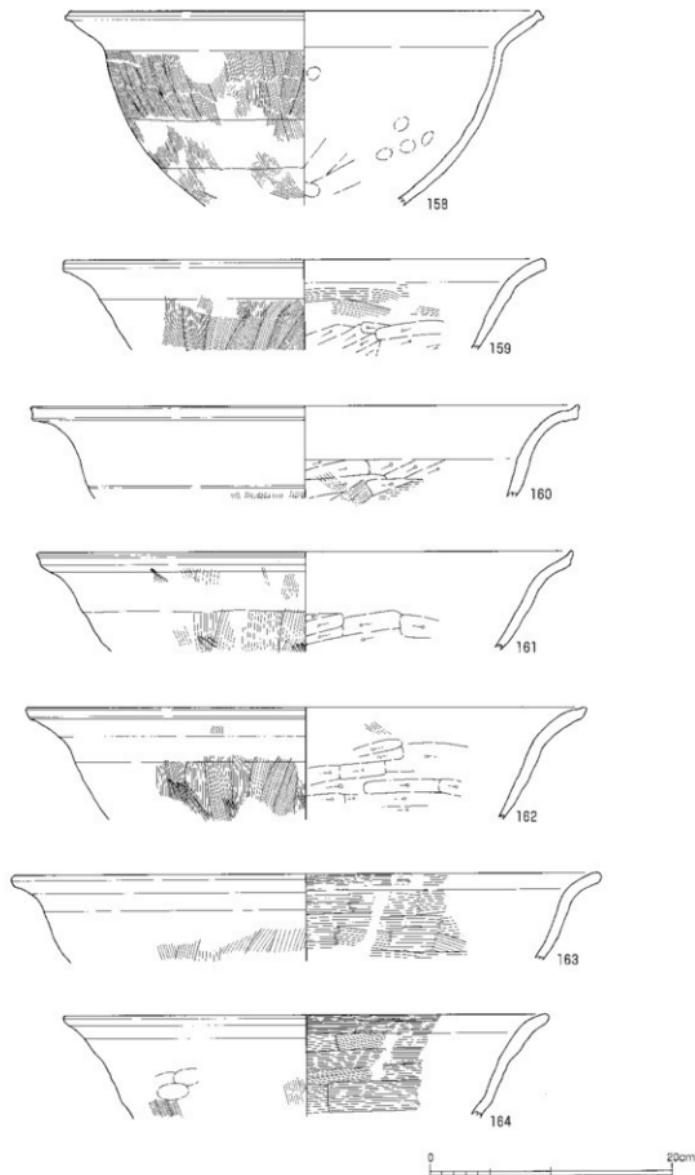
出土遺物 5

図版6

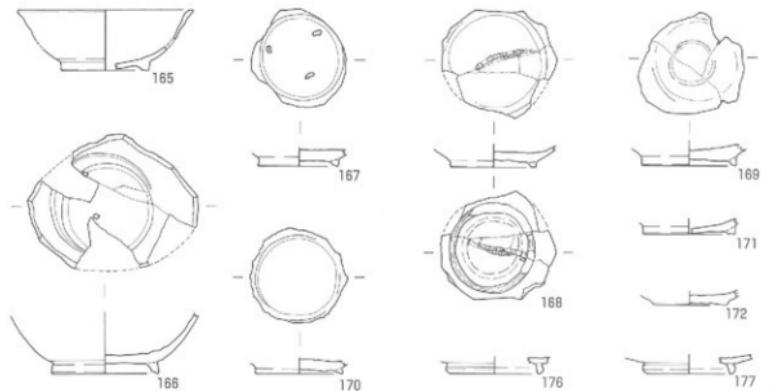


0 20cm

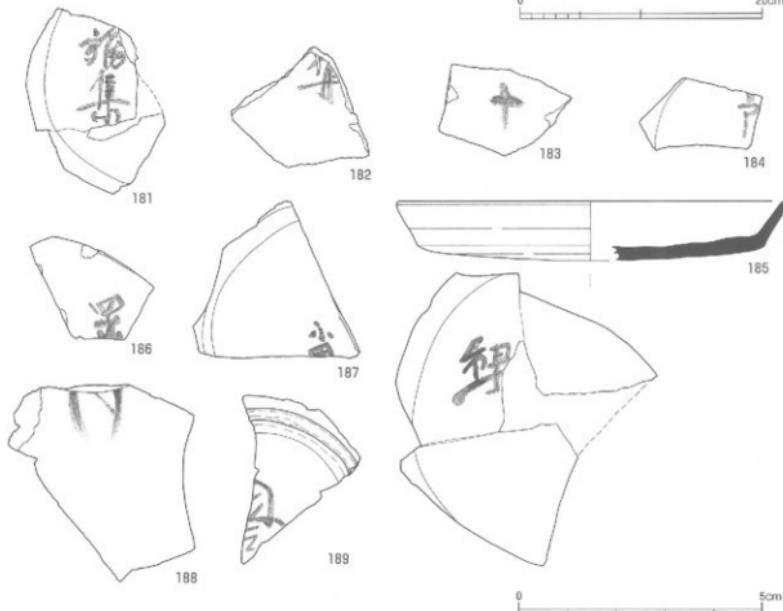
出土遺物 6



出土遺物 7

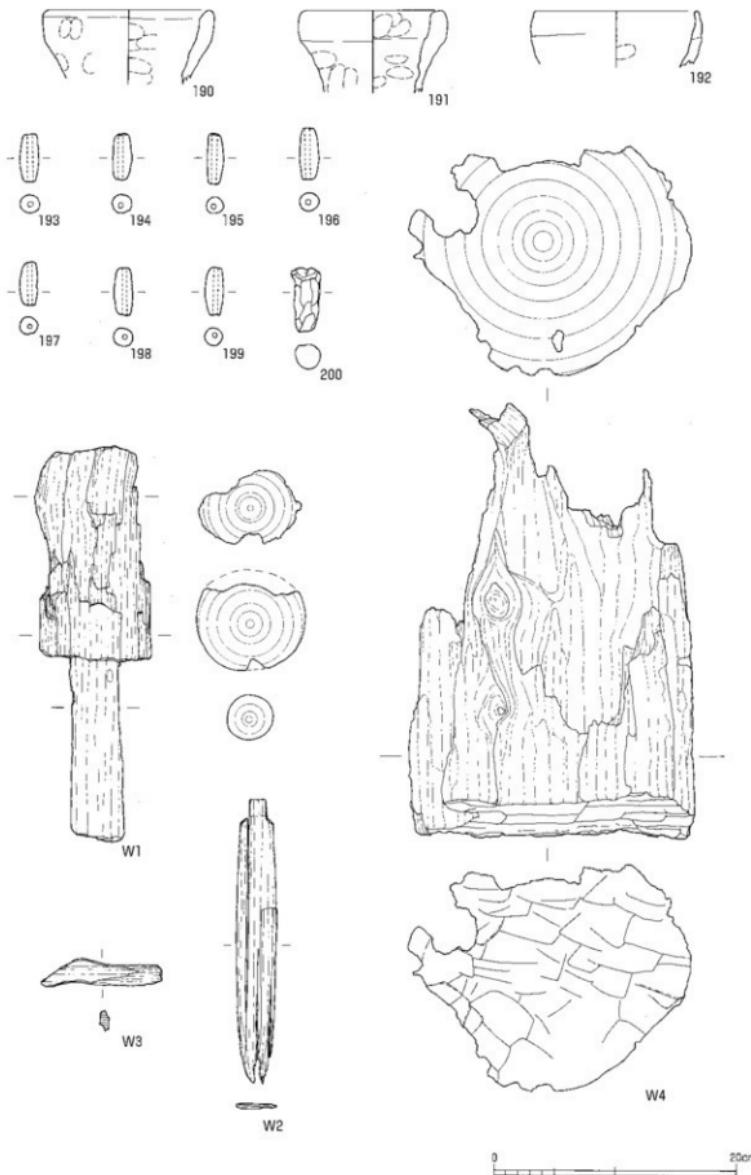


0 20cm

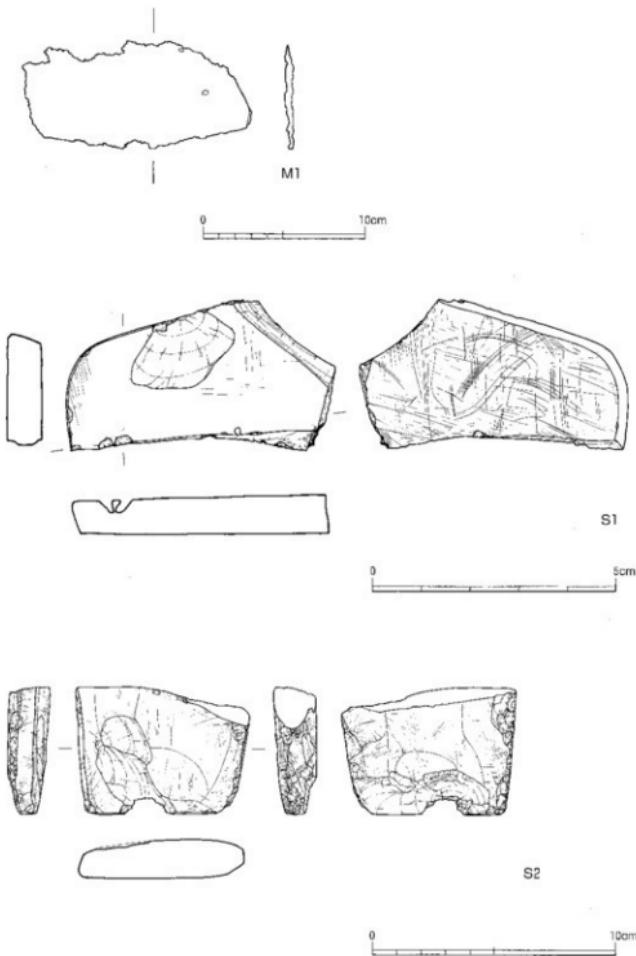


0 5cm

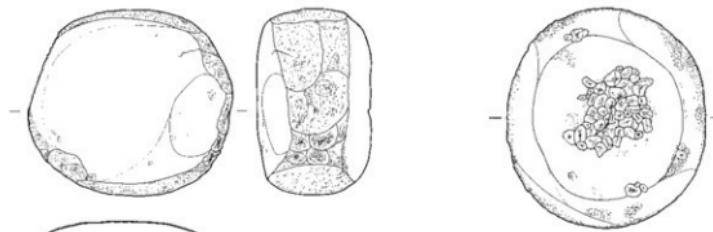
出土遺物 8 (施釉陶器・墨書土器)



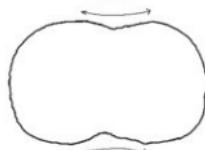
出土遺物 9 (土製品・木製品)



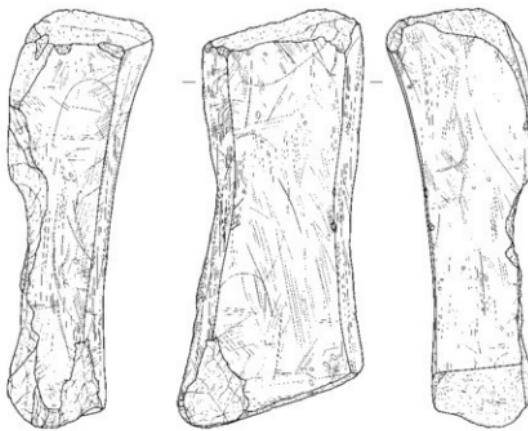
出土遺物 10 (鉄製品・石製品)



S3



S4



S5



出土遺物 11 (石製品)



遺跡全景（航空写真）



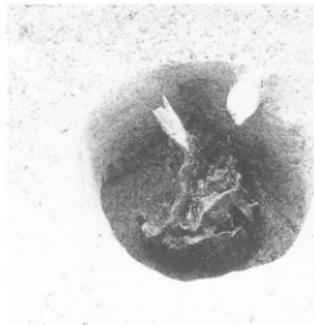
遺跡全景（南西より）



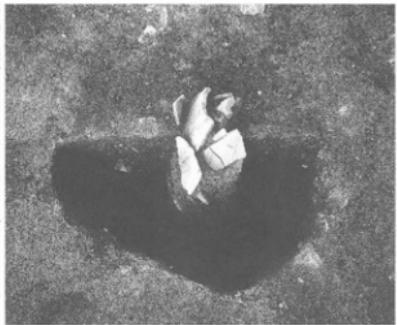
調査区内の土層



柱穴群（東より）



P-3 柱根出土状況



P-1 土器出土状況



P-3 内の柱根（東より）



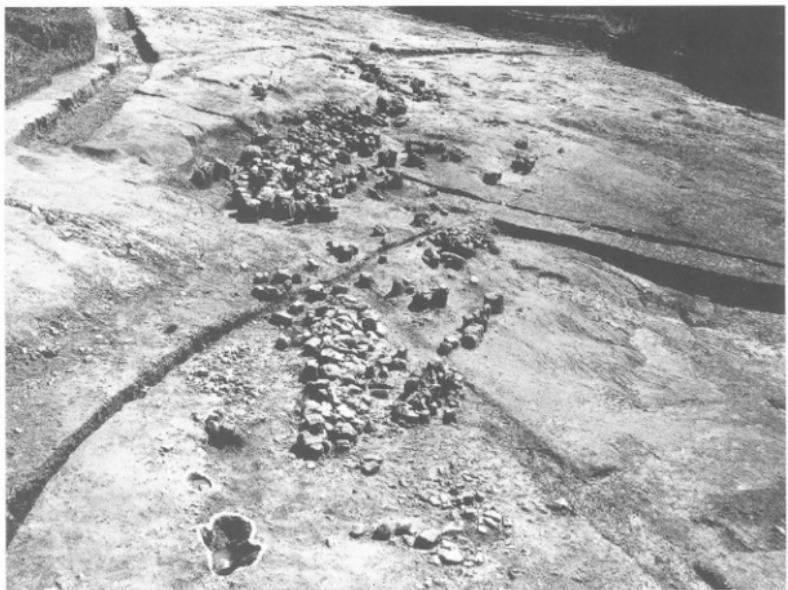
横榙出土状況（北東より）



谷肩部と礫群（南より）



谷肩部と礫群（東より）



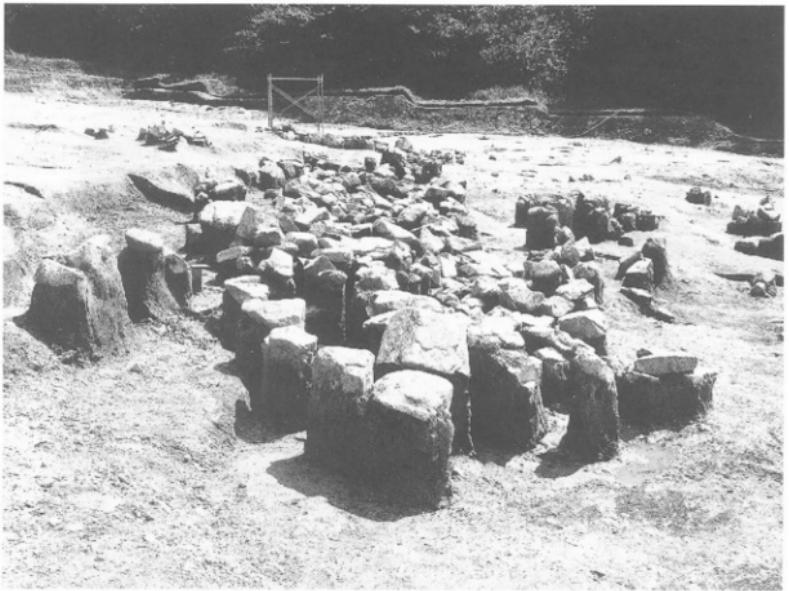
砾群全景（南西より）



砾群全景（北東より）



石群細部（北東より）



石群細部（南西より）





7



8



6



23



31



16



19



35



37



38



40



41



42



44



51



54



55



61



62



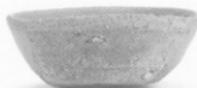
65



67



72



74



77



84



88



89



93



90



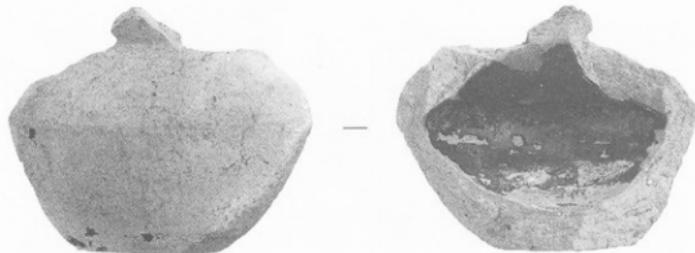
120



出土遺物（3）



113



111



117

201



119



121

出土遺物（4）



132



131



129



124



122



123



141



126



127



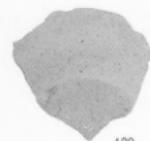
128



135



125



130

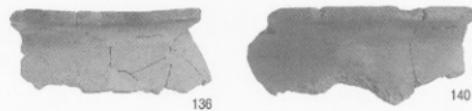


133

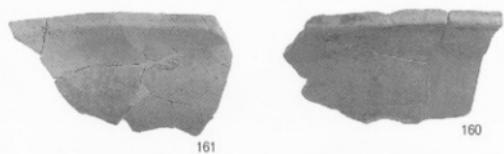


134

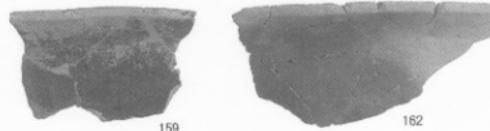
出土遺物（5）



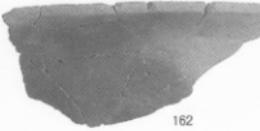
158



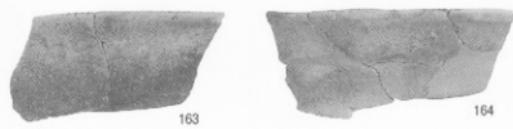
161



159

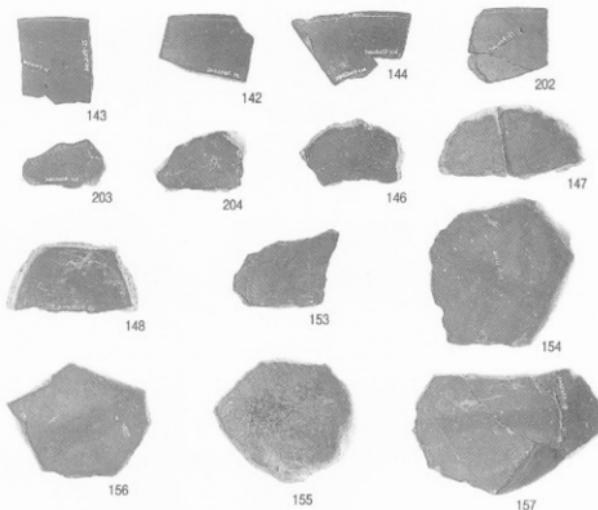


162

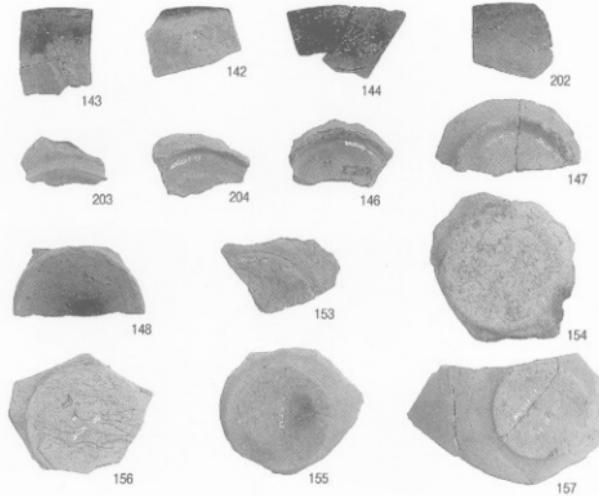


163

164



黒色土器 A 類内面

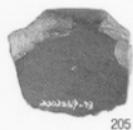


黒色土器 A 類外面

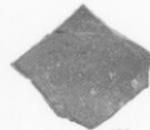
出土遺物 (7)



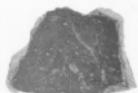
145



205



152



150



149

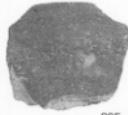


151

黒色土器B類内面



145



205



152



150



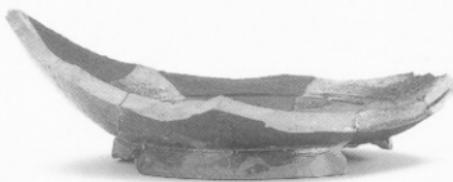
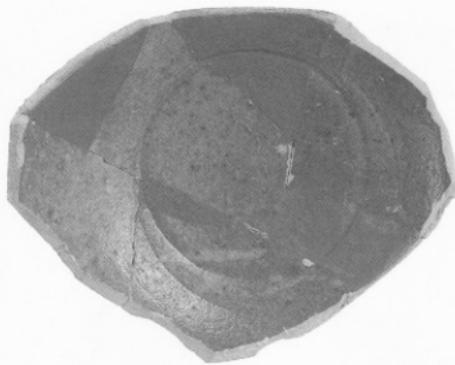
149



151

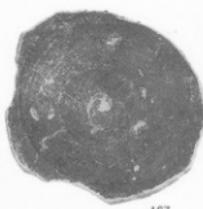
黒色土器B類外側

出土遺物(8)

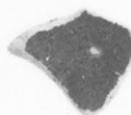




170



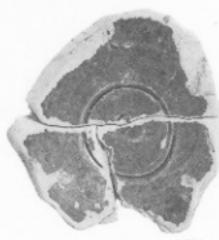
167



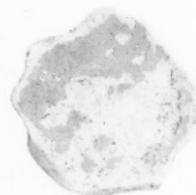
171



168



169



172

縄釉陶器内面



170



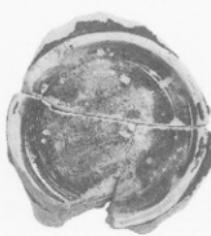
167



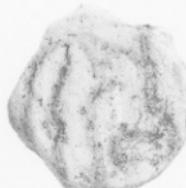
171



168



169



172

縄釉陶器外面

出土遺物 (10)



175



177



174



173



176

灰釉陶器



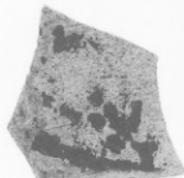
206



207



208



209



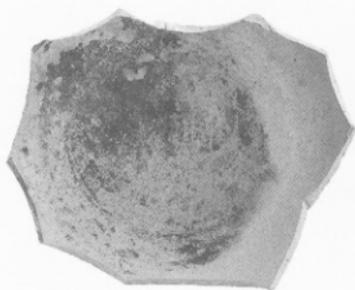
210



211

灰釉陶器・白磁

出土遺物 (11)



178



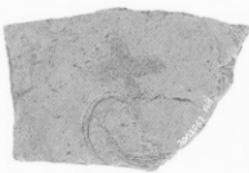
180



179



181



183

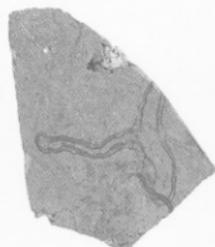


182

出土遺物 (12)



184



186



187



189



188



185



製塩土器



出土遺物（14）

200



W2



W1



|



W3



W4

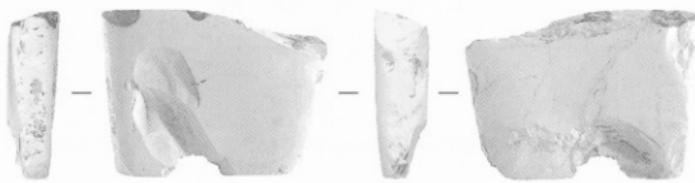


—

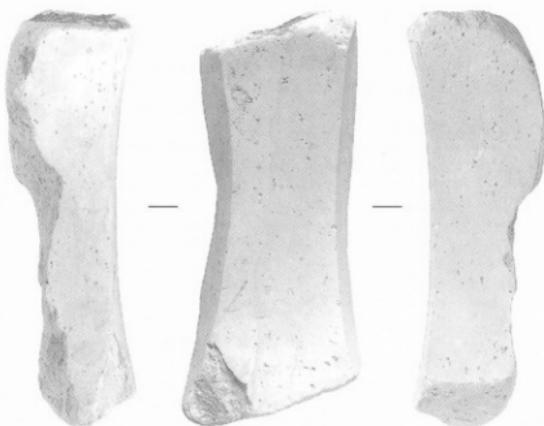


S1

出土遺物 (15)



S2



S5



S4



S3

出土遺物 (16)

# 報告書抄録

ふりがな	ほうたにいせき							
書名	方谷遺跡							
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路II建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第344冊							
編著者名	吉藏雅仁・森内秀造・佐々木哲子							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500番地				TEL 079-437-5589			
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号				TEL 078-341-7711			
発行年月日	2008(平成20)年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
方谷遺跡	兵庫県朝来市 山東町	282251	2002069	35度 31分 41秒	134度 48分 28秒	平成14年6月24日 ～ 平成14年10月11日	2,554m <sup>2</sup>	一般国道483号 北近畿豊岡自動 車道春日和田山 道路II建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
方谷遺跡	集落址	8世紀前葉～10世紀			須恵器・土師器 縁釉陶器		墨書き土器	

兵庫県文化財調査報告 第344冊

# 方谷遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和出山道路Ⅱ建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月20日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 加古郡播磨町大中500番地  
TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39